

和歌山県立近代美術館

年 報

昭 和 52 年 度

昭和52年度

# 和歌山県立近代美術館年報

## 目次

1	主要行事	1
2	主催展覧会	2
	昭和52年度第1期県立近代美術館常設展	2
	第4回移動美術館「移動美術館'77有田展」	3
	昭和52年度第2期県立近代美術館常設展	4
	川端龍子展	5
3	共催展覧会	7
4	貸館展覧会	8
5	普及活動	10
6	昭和52年度所蔵作品	13
7	所蔵品貸出状況	14
8	県立近代美術館協議会委員	14
9	県立近代美術館職員講成	14
	原勝四郎『滞欧日誌』について(Ⅱ)	15

# 1. 主要行事

4月2日～5月1日	昭和52年度第Ⅰ期県立近代美術館常設展
5月22日	県立近代美術館友の会評議員会
6月9日～6月12日	第4回移動美術館「移動美術館'77有田展」
6月23日～7月14日	第15回和歌山県美術家協会展 第1期＝6月23日～6月27日 〈生花・書・工芸・日本画〉 第2期＝6月30日～7月4日 〈洋画・彫塑・写真・現代造形〉
7月7日～7月11日	第12回県立近代美術館友の会展
7月14日～8月28日	昭和52年度第Ⅱ期県立近代美術館常設展
10月8日～11月3日	秋の特別展「川端龍子展」
10月17日	第13回県立近代美術館協議会
10月20日～10月23日	美術鑑賞ツアー「韓国歴史と美術を訪ねる旅」
11月17日～12月5日	第31回県展 第1期＝11月17日～21日 〈生花・写真・現代造形〉 第2期＝11月24日～28日 〈日本画・書・工芸〉 第3期＝12月1日～5日 〈洋画・彫塑〉
11月20日	「エルミタージュ美術館展」鑑賞バスツアー
12月16日～12月18日	第31回県展新宮地方展
1月24日～3月31日	県民文化会館の消防施設工事に伴ない臨時休館
3月6日	第14回県立近代美術館協議会

# 2. 主催展覧会

## ○ 昭和52年度第Ⅰ期県立近代美術館常設展

会期 4月2日～5月1日（毎週火曜日休館）

新取館蔵版画の紹介を兼ね、郷土ゆかりの作家の版画作品を展観した。（入観者2,497人）

### 出品目録

1	浜口陽三	洋梨とぶどう	メゾチント	28.0× 37.0	1951
2	〃	スペイン風油入れ	〃	28.5× 28.5	1954
3	〃	魚と果物	〃	29.0× 39.0	〃
4	〃	あざみ	〃	29.5× 39.5	1957
5	〃	クローバーの実	〃	29.5× 29.0	〃
6	〃	ざくろ	〃	29.5× 44.0	1958
7	〃	ういきょう	〃	29.0× 44.0	〃
8	〃	魚とさくらんぼ	〃	14.3× 19.2	〃
9	〃	白菜	〃	29.5× 44.0	1960
10	〃	ひとで	〃	9.6× 7.6	〃
11	〃	たにし	〃	9.6× 7.6	〃
12	〃	毛糸と編棒	〃	23.3× 53.8	1962
13	〃	トリコット	〃	24.5× 52.0	〃
14	〃	てんとう虫	〃	5.5× 5.7	1963
15	〃	黒いさくらんぼ	〃	19.5× 24.3	1964
16	〃	19のさくらんぼと1つのさくらんぼ	〃	23.5× 53.5	1965
17	〃	赤い鉢と黒いさくらんぼ	〃	47.0× 62.0	1966
18	〃	蝶	〃	11.5× 11.5	1968
19	〃	蝶と太陽	〃	19.5× 19.5	1969
20	〃	26のさくらんぼ	リトグラフ	60.5× 46.5	1971
21	〃	テーブル掛けとさくらんぼ	〃	60.5× 46.5	〃
22	〃	くるみ	〃	60.5× 46.5	〃
23	〃	赤いパイプ	〃	60.5× 46.5	〃
24	〃	まのレモン	メゾチント	16.0× 16.0	1976
25	吉田政次	静 No.36	木版	37.0× 26.5	1953
26	〃	静 No.70	〃	32.5× 40.0	1955
27	〃	地の泉 No.1	〃	56.0× 82.5	1956
28	〃	哀愁の日〈哀愁記より〉	〃	59.3× 43.5	1957
29	〃	相対性絵画 No.5	〃	157.0× 157.0	1959
30	〃	空間 No.8	〃	74.5× 41.0	1960
31	〃	空間 No.17	〃	57.0× 57.0	1962
32	〃	空間 No.50	〃	45.0× 43.0	1965
33	〃	我が宇宙 No.1	〃	213.0× 216.0	〃
34	〃	ミニとデモの時代 No.1	〃	87.0× 72.0	1968
35	〃	躍動する心 No.1	〃	79.0× 70.0	〃
36	〃	青春の輝き No.2	〃	87.0× 72.0	1965

37	村井正誠	僧	シルクスクリーン	75.0× 56.0	1973
38	〃	太陽と鳥	〃	75.0× 56.0	1975
39	宇佐美圭司	版画集〈顔〉より	〃	74.5× 55.3	1973~4
45					
46	保田春彦	版画集〈作品〉より	〃	56.0× 74.0	1971
50					

### ○ 第4回移動美術館 「移動美術館'77有田展」

本県の地理的状況から広く一般県民に館藏品等を展覧し、美術に対する関心の昂揚を図るため、本年度は有田市において開催した。(入観者1,077人)

会期 6月9日~6月12日 / 会場 有田市・安謐橋会館6階大集会室

主催 和歌山県立近代美術館

後援 有田市 有田市教育委員会 有田地方教育委員会連絡協議会 和歌山県美術家協会 和歌山県立近代美術館友の会

#### 出品目録

##### 〔日本画〕

1	小野竹喬	春芽	彩色・紙	45.0× 37.9	1972
2	亀井玄兵衛	みのり	〃	165.0× 122.0	1961 第33回青龍社展
3	野長瀬晩花	被布着たる少女	彩色・絹	114.0× 134.0	1911 第1回新古美術展
4	〃	スペインの田舎の子供	彩色・寒冷紗	136.0× 110.0	1924 第4回国画創作協会展
5	〃	夢ばかりみている男	彩色・紙	48.0× 36.2	1950
6	稗田一穂	流翳	〃	162.1× 112.1	1962 第26回新制作展
7	日高昌克	山峡池畔図	墨・紙	44.0× 56.0	1960

##### 〔洋画〕

8	石垣栄太郎	恐怖	油彩・キャンパス	64.0× 104.0	1940
9	〃	スケッチクラス	〃	56.0× 72.0	1947
10	川口軌外	ボヘミアン	〃	130.0× 96.0	1928 第5回1930年協会展
11	〃	地維	〃	154.5× 193.5	1932 第2回独立展
12	〃	日傘と人	〃	119.5× 89.6	1953 第2回日本国際美術展
13	木下義謙	静物	〃	72.2× 90.9	1931 1931年サロン・ドートンヌ展 第19回二科展特陳
14	〃	横光線の肖像	〃	90.9× 72.2	1935 第22回二科展
15	木下孝則	後向きの裸婦習作	〃	100.0× 80.0	1925 第12回二科展
16	〃	赤衣の女	〃	71.5× 51.0	1934 1934年サロン・ドートンヌ展
17	高井貞二	赤い糸	〃	194.0× 73.0	1967
18	〃	スリーサークル	〃	131.5× 176.5	〃
19	原勝四郎	瀬戸風景	油彩・カルトン	65.0× 53.0	1935
20	〃	道化	〃	89.0× 72.0	1941 第28回二科展
21	ヘンリー杉本	寺院のみえるピーエー村	油彩・キャンパス	79.0× 99.0	1940
22	〃	パン配達娘	〃	90.0× 70.0	1963
23	保田龍門	村の娘	〃	83.0× 67.5	1916
24	〃	読書	〃	65.0× 53.0	1921

##### 〔版画〕

25	宇佐美圭司	顔	シルクスクリーン・紙	74.5× 55.3	1973
26	浜口陽三	スペイン風油入れ	メゾチント・紙	28.5× 28.5	1954
27	〃	魚とさくらんぼ	〃	14.3× 19.2	1958

28	浜口陽三	糸と編棒	メゾチント・紙	23.3× 53.8	1962
29	〃	19のさくらんぼと 1つのさくらんぼ	〃	23.3× 53.2	1965
30	村井正誠	僧	シルクスクリーン・紙	75.0× 56.0	1973
31	〃	太陽と鳥	〃	75.0× 56.0	1975頃
32	保田春彦	作品	〃	56.5× 38.6	1971
33	吉田政次	哀愁の日〈哀愁記より〉	木版・紙	59.3× 43.5	1957
34	〃	空間 No.17	〃	55.5× 56.3	1962 第30回日本版画協会展 第8回サンパウロ・ビエンナーレ展
35	〃	ミニとデモの時代 No.1	〃	88.0× 69.0	1968 第6回東京国際版画ビエンナーレ展 第1回バルセロナ国際版画展

##### 〔彫塑〕

36	建畠大夢	お湯のつかれ	ブロンズ	H 66.7	1913 第7回文展
37	〃	恩師の顔	〃	H 36.0	1939 東方彫塑院展
38	保田龍門	アンドレの首	〃	H 19.0	1922 第10回院展
39	〃	うずくまる女	〃	H 35.5	1947頃
40	〃	鳩を持つ女	〃	H 82.0	1949頃

### ○ 昭和52年度第Ⅱ期県立近代美術館常設展

会期 7月14日~8月28日(毎週火曜日休館)

館藏品及び寄託作品のうち、郷土ゆかりの作家6人の日本画作品を展覧した。(入観者3,282人)

#### 出品目録

1	下村観山	春暖	彩色・絹		1927頃
2	野長瀬晩花	スペインの田舎の子供	彩色・寒冷紗	136.0× 110.0	1924 第4回国展
3	〃	被布着たる少女	彩色・絹	114.0× 134.0	1911 第16回新古美術品展
4	〃	夢ばかりみている男	彩色・紙	48.0× 36.4	1950 第8回白炎社展
5	〃	女優	〃	36.4× 48.0	1947 第3回白炎社展
6	〃	猫を抱く女	〃	48.0× 36.4	〃
7	〃	路傍青物市	〃	25.5× 45.5	1932頃
8	〃	五月の庭	〃	77.0× 137.5	1961
9	〃	花	彩色・絹	46.0× 34.2	1950頃
10	〃	夕陽にかえる漁夫	画稿 彩色・紙	169.0× 360.0	1920
11	〃	水汲みにゆく女	画稿 〃	52.0× 55.5	1926
12	〃	海近き町の舞妓	画稿 〃	30.5× 40.7	1927
13	〃	島の女	〃	145.0× 51.5	1916
14	〃	門つけ	〃	131.5× 30.0	〃
15	〃	一茶遺跡と四季句集	〃	23.9× 466.2	1943頃
16	〃	少女習作	〃	75.5× 41.0	1924
17	〃	婦人像デッサン	紙	18.0× 10.7	1922
18	稗田一穂	流翳	彩色・紙	162.1× 112.1	1962 第26回新制作展
19	〃	月下	〃	178.0× 229.0	1974 第1回創画展
20	〃	小漣	〃	141.0× 242.0	1970 第34回新制作展
21	亀井玄兵衛	みのり	彩色・紙	165.0× 122.0	1961 第33回青龍社展

22	亀井玄兵衛	観音立像	彩色・紙	121.0× 74.5	1965	第37回青龍社展
23	"	白梅	"	71.0× 120	1968	第2回東方展
24	日高昌克	山峡池畔図	墨・紙	44.0× 56.0	1960	
25	小野竹喬	春芽	彩色・紙	45.0× 37.9	1972	

## ○ 川端龍子展

会 期10月8日～11日3日 (入観者 10,001人 / 有料8,663人)  
 主 催 和歌山県立近代美術館 社団法人青龍社龍子記念館 / 協 賛 財団法人川端龍子顕彰会  
 後 援 和歌山県美術家協会 和歌山県立近代美術館友の会 和歌山市教育委員会 和歌山市 和歌山市美  
 育協会

郷土作家シリーズの一環として、日本画壇に不滅の光を放つ偉大な画家である川端龍子を取りあげた。  
 川端龍子は、明治18年(1855)和歌山市に生まれ、最初は洋画を学び洋画家としての道を歩んだ後、大  
 正3年(1914)日本画に転じ、日本美術院の主催する院展にあって活躍したが、故あって昭和3年(19  
 28)同院を脱退、翌4年自から「青龍社」を結成、青龍社展を主舞台に自己の芸術の進むべき方向を会場  
 芸術と定め、伝統的な日本画壇にあって、因襲にとらわれない大胆かつ剛健な大作、問題作を続々と発表  
 し、精力的な活躍を続ける一方、「青龍社」を日本画壇の有力団体に育てあげるなど、我が国の近代日本  
 画史上偉大な足跡を遺し、昭和41年(1966)81才で世を去ったが、本展覧会は、このような川端龍子の  
 画業を回顧し、その意味を問おうとしたものである。

### 出品目録

#### 〔油彩画〕

1	ひまわり	キャンバス・油彩・額	103.0× 52.0			
2	平等院	"	30.0× 40.0			
3	女神	"	27.7× 12.2			
〔日本画〕						
4	慈悲光礼讃	絹・彩色・軸(双幅)	各 140.0× 150.0	1918	第5回院展	
5	土	絹・彩色・軸	151.5× 136.4	1919	第6回院展	
6	花と鈎屑	絹・彩色・額	138.2× 109.5	1920	第7回院展	
7	賭博者	"	90.0× 120.0	1923	第10回院展	
8	印度更紗	絹・彩色・軸	110.0× 140.0	1925	第12回院展	
9	佳人好在	"	136.3× 115.1	"	"	
10	使徒所行讃	絹・彩色・額	227.3× 484.8	1926	第13回院展	
11	請雨曼荼羅	"	227.0× 170	1929	第1回青龍社展	
12	草炎	絹・金彩・屏風(六曲一双)	各 242.4× 386.3	1930	第2回青龍社展	
13	新樹の曲	絹・彩色・屏風(六曲一双)	各 181.0× 399.6	1932	第4回青龍社展	
14	後圃菟菜	紙・淡彩・屏風(二曲一隻)	166.7× 166.7	1932	"	
15	山葡萄	絹・彩色・額	181.8× 212.1	1933	第5回青龍社展	
16	源義経(ジンギスカン)	紙・彩色・額	242.4× 727.2	1938	第10回青龍社展	
7	大同石窟(大露仏・接引洞)	"	各 242.4× 90.9	"	"	
18	香炉峰	"	242.4× 727.2	1939	第11回青龍社展	
19	水雷神	"	242.4× 484.8	1944	第16回青龍社展	
20	臥龍	"	242.0× 484.0	1945	第17回青龍社展	
21	傲赤不動	"	242.4× 151.5	1946	第18回青龍社展	
22	秋縁	"	242.0× 139.3	1947	第19回青龍社展	
23	刺青	"	160.0× 248.0	1948	第20回青龍社展	
24	癩祭	"	151.5× 242.4	1949	第21回青龍社展	

25	水巴	紙・彩色・額	139.4× 75.8	1950	第18回春の青龍社展
26	夢	"	151.5× 242.8	1951	第23回青龍社展
27	涼露品	"	242.4× 727.2	1952	第24回青龍社展
28	花鳥諷詠	"	115.1× 181.8	1954	第22回春の青龍社展
29	筏流し	"	242.4× 727.2	1959	第31回青龍社展
30	白聖と群青	"	106.5× 115.1	1962	第30回春の青龍社展
31	百慕図	"	172.7× 167.7	1963	第31回春の青龍社展
32	阿修羅の流れ	"	242.4× 484.8	1964	第36回青龍社展

(河童シリーズより)

33	河童腕白図	紙・彩色・額	152.0× 72.0	1955	第23回春の青龍社展
34	ミス・カップ	"	139.4× 242.4	1957	第29回青龍社展
35	遠足	"	77.3× 127.3	"	第17回青々々展
36	似てる	"	79.0× 112.0	1958	第26回春の青龍社展
37	あやかる	"	112.0× 79.0	1960	第28回春の青龍社展
38	花下独酌	"	112.1× 83.3	"	"

〔草描〕

39	南洋点描より 1	紙・淡彩・額	47.0× 69.0	1935	
40	南洋点描より 2	"	69.0× 47.0	"	
41	南洋点描より 3	"	47.0× 69.0	"	
42	南洋点描より 4	"	47.0× 69.0	"	
43	南洋点描より 5	"	47.0× 69.0	"	
44	四国遍路より 雪蹊寺	"	69.0× 47.0	1950	
45	四国遍路より 一ノ宮寺	"	47.0× 69.0	"	
46	白浜・円月島	"	47.0× 69.0	1958	
47	西国三十三ヶ所巡礼より 壺坂寺	"	69.0× 47.0	1958	
48	坂東三十三ヶ寺巡礼より 鎌倉鶴岡八幡宮神輿	"	47.0× 69.0	1961	

〔資料〕

49	さしえ・年賀状				
50	遺品	筆・印章・硯・スケッチブックなど			

### 3. 共催展覧会

#### ○ 第15回和歌山県美術家協会展

和歌山県美術家協会々員による総合美術展  
 会期 第1期=6月23日~27日(生花、書、日本画、工芸) 第2期=6月30日~7月4日(洋画、彫塑、写真、現代造形)  
 主催 和歌山県美術家協会 和歌山県立近代美術館 / 後援 朝日新聞和歌山支局、和歌山県立近代美術館友の会

#### ○ 第12回和歌山県立近代美術館友の会展

和歌山県立近代美術館友の会活動の一環として、各実技講座で制作した作品等によるアマチュアの総合美術展  
 会期 7月7日~11日(洋画、日本画、写真、陶芸)  
 主催 和歌山県立近代美術館友の会 和歌山県立近代美術館 / 後援 和歌山県美術家協会

#### ○ 第31回和歌山県美術展覧会「県展」

県民の美術に関する愛好心と鑑賞力を啓発し、創作意欲の昂揚をはかり、本県における美術文化の向上発展に資するため開催する公募展(第10回県民文化祭参加)  
 会期 第1期=11月17日~21日(生花、写真、現代造形)  
 第2期=11月24日~28日(日本画、書、工芸)  
 第3期=12月1日~5日(洋画、彫塑)  
 新宮展=12月16日~18日(各部門選抜/除生花) 於・新宮市民会館  
 主催 和歌山県教育委員会、和歌山県立近代美術館 毎日新聞和歌山支局 新宮市教育委員会(新宮展)  
 主管 和歌山県美術家協会 後援 和歌山県 新宮市(新宮展)

応募点数・入選(入賞)点数・展示点数 (本展)

区分 部門	応募点数		入選点数		入賞 点数				無鑑査以上の出品数				総展示点数			
					特選賞		奨励賞		無鑑査		招待		審査員			
	30回展	31回展	30回展	31回展	30回展	31回展	30回展	31回展	30	31	30	31	30	31		
生花	28	26	26	25	4	4	1	1	1	1	5	7	4	6	36	39
現代造形	22	25	18	17	4	4	1	1	3	2	2	0	5	5	28	24
写真	294	334	148	150	4	4	9	9	7	9	5	5	11	11	171	175
日本画	55	64	52	63	4	4	3	3	14	12	6	6	11	11	83	92
工芸	87	110	55	44	4	4	3	4	0	2	6	8	4	7	65	61
書	139	165	139	130	4	4	7	9	22	22	20	21	16	17	197	190
洋画	402	375	128	132	4	4	14	12	23	27	33	33	17	21	201	213
彫塑	33	39	30	33	4	4	2	2	3	2	4	3	6	6	43	44
計	1060	1138	596	594	32	32	40	41	73	77	81	83	74	84	824	838

(新宮地方展)

区分 部門	一 般				無 鑑 査		招 待		審 査 員		総展示点数	
	入 選		入 賞									
	30回	31回	30回	31回	30回	31回	30回	31回	30回	31回	30回	31回
日本画	4	0	6	6	1	1	0	0	10	11	21	18
洋画	26	21	14	17	4	4	4	4	21	20	69	66
彫塑	0	0	3	5	0	0	0	0	3	6	6	11
工芸	0	1	1	7	0	0	0	0	1	7	2	15
書	11	7	13	11	5	5	1	2	17	16	47	41
写真	9	4	13	13	2	1	1	1	11	11	36	30
現代造形	0	0	2	3	1	0	0	0	4	4	7	7
計	50	33	52	62	13	11	6	7	67	75	188	188

### 4. 貸館展覧会

会 期	名 称	概 要	展 示 室
4月1日~4月3日	第24回洗心書道展	書/西林凡石門下	一/中/小
7日~11日	和葛会書道展	書/県立和歌山商業高校OBグループ	一般展示室
7日~11日	翳 展	洋画/同好グループ	小展示室
14日~18日	和歌山大学総合美術展	絵画・書・写真・生花/和歌山大学	一展/中展
14日~18日	グループ「波」洋画展	洋画/グループ「波」	小展示室
21日~25日	第9回有人クラブ写真展	写真/駒木根紅花主宰	一般展示室
21日~25日	火曜会展	洋画/同好グループ	小展示室
28日~5月2日	第13回葵フォトグループ写真展	写真/亀忠男主宰	一般展示室
28日~2日	和大絵画部4回生展	洋画/和歌山大学4回生	小展示室
5月5日~9日	集団「光」写真展	写真/集団「光」	一般展示室
5日~9日	睦林会展	日本画/睦林会	大展示室
5日~9日	エトアール洋画展	洋画/エトアール洋画会	中展/小展
12日~16日	和歌山市医師会美術展	絵画・書・工芸/和歌山市医師会グループ	一般展示室
12日~16日	第42回木国写友会展	写真/島村安彦主宰	中展示室
12日~16日	勝和水墨画展	水墨画/同好グループ	小展示室
19日~22日	黎明クラブ写真展	写真/明楽光三郎主宰	一般展示室
6月9日~6月13日	示現会和歌山巡回展	洋画/中央展作品(選抜)と支部会員作品	全 館
16日~20日	オール関西フォトグループ展	写真/関西在住写真家グループ	一般展示室
16日~20日	第1学期学校美術展	和歌山市の児童、生徒の作品	大展示室
16日~20日	和大絵画部2・3回生展	洋画/和歌山大学2・3回生	中展示室
16日~20日	グループ「しつ」展	漆芸/漆器同好グループ	小展示室
7月7日~7月11日	第7回洋画12人展	洋画/同好グループ	一般展示室
7日~10日	第3回和興会展	書/山本興石主宰	小展示室
14日~18日	関西二科写真部公募展	写真/関西二科写真部	一般展示室
14日~18日	第8回県高校書道科教員書作展	書/県高校書道教育連盟	中展示室
14日~18日	和歌山ステーション絵画教室 小品展	洋画/和歌山ステーション絵画教室	小展示室
21日~25日	グループ「ヴェル」展	洋画/同好グループ	一般展示室
21日~25日	ふれあい写真展	写真/同好グループ	中展示室
21日~25日	Nフラワーデザイングループ展	フラワーデザイン/那須徳子主宰	小展示室
28日~8月1日	第30回和歌山県書道協会展	書/和歌山書道協会	一/中/小
8月4日~8日	形成展	洋画/同好グループ	一般展示室
4日~8日	青甲会展	洋画/青甲会	中展示室
4日~8日	律の会展	洋画/斎田武夫主宰	小展示室
11日~15日	グループプリミティブ美術展	絵画、デザイン/和歌山県出身美大生	一般展示室
11日~15日	第4回県立海南高校OB美術展	絵画/県立海南高校OB美術グループ	中展示室
11日~15日	ひまわり展	洋画/県警察本部絵画グループ	小展示室
18日~22日	グループ旺美洋画展	洋画/和歌山成人学校絵画教室OB	一般展示室
18日~22日	老魯会習作書展	書/大岡皓崖主宰	中展/小展
25日~29日	第5回県下高校教員美術展	洋画、彫塑/県下高校美術教員	一般展示室
25日~29日	あくど展	洋画/中学校美術教員グループ	中展示室

8月25日～8月29日	毎日文化教室洋画部展	洋画 / 毎日文化教室洋画部	小展示室
9月1日～9月5日	紀州美術会展	洋画 / 紀州美術会	一般展示室
1日～5日	第9回絵画サークル「樹」展	洋画 / 絵画サークル「樹」	中展示室
1日～5日	第6回和歌山版画協会展	版画 / 和歌山版画協会	小展示室
8日～11日	第10回和歌山県勤労者美術展	日本画など6部門 / 勤労者による公募展	全館
15日～19日	第11回三光会日本画展	日本画 / 山東光風主宰	一展 / 小展
15日～19日	書人会同人展	書 / 書人会同人	大展示室
15日～19日	日本画青樹会展	日本画 / 青樹会	中展示室
22日～26日	第26回県下高校商業美術展	ポスター、デザイン等 / 県商業教育研究会	一般展示室
22日～26日	第24回和歌山文化協会展 (県民文化祭参加)	絵画、書、写真 / 和歌山文化協会	大展示室
22日～26日	新世紀美術協会グループ展	洋画 / 新世紀和歌山グループ	中展示室
22日～26日	健筆書道会習作展	書 / 健筆書道会	小展示室
29日～10月3日	県いけばな協会展 (県民文化祭参加)	生花 / 和歌山県いけばな協会	全館
10月6日～10日	和歌山日曜画家展	洋画 / 和歌山日曜画家グループ	一般展示室
13日～17日	美術サークル連合展 (県民文化祭参加)	絵画 / 県美術サークル連絡協議会	一般展示室
20日～24日	紙人形展 (県民文化祭参加)	紙人形 / グループたちばな	一般展示室
27日～31日	第18回和歌山旺玄美術展	洋画 / 旺玄会和歌山クラブ	一般展示室
11月3日～11月7日	俳画展 (県民文化祭参加)	俳画 / 県俳画協会	一般展示室
12月8日～12月12日	和歌山大学絵画部展	洋画 / 和歌山大学絵画部	一展 / 中展
8日～12日	手あみ手芸作品展	手芸 / 綾部道代手あみ手芸教室	小展示室
15日～19日	写真展 (県民文化祭参加)	写真 / 全日本写真連盟和歌山支部	一般展示室
15日～19日	県下高校芸術祭書道展 (県民文化祭参加)	書 / 県高校書道教育研究会	大 / 中 / 小
22日～25日	第20回花王展	絵画、写真、生花 / 花王石鯨和歌山工場	一 / 中 / 小
22日～25日	県下高校芸術祭美術展	絵画、彫塑 / 県高校教育研究会美術部会	大展示室
1月12日～1月16日	第7回オークレイ展	絵画 / 田中善弘主宰	一般展示室
12日～16日	県文化表彰、名匠表彰受賞者展	絵画、写真、書、工芸、生花他	大展 / 小展
12日～16日	拓正会、拓画展	拓画 / 東洋魚拓、拓正会	中展示室
19日～23日	新構造社和歌山支部展	洋画 / 新構造社和歌山支部	一展 / 小展
19日～23日	和墨会展	書 / 和歌山大学書道部	中展示室
20日～23日	東雲会書作展	書 / 谷口東峰主宰	大展示室
○ 1月24日から3月31日まで、県民文化会館の消防施設工事のため休館となり、この期間予定していた主催展、貸館展が、延期又は中止となった。			

## 5. 普及活動

### ○「美術館だより」

「美術館だより」は館の広報紙である。館主催、共催展覧会の紹介及び解説、美術に関する論文及び随筆、当館友の会の行事案内、活動報告、和歌山における美術文化関係ニュース、貸館展覧会及び各種美術展だより等を掲載している。毎月1日発行、発行部数2,000部。

号No.	発行日	主要記事
136号	4月1日	箱の中の宝物(萩原葉子) 田中恭吉展によせて(小島善太郎) 田中恭吉展をおえて(太田将勝) 新収蔵作品の紹介(2) 昭和52年度県立近代美術館第1期常設展「版画の世界-宇佐美圭司・浜口陽三・村井正誠・保田春彦・吉田政次」
137号	5月1日	離任ごあいさつ(高巖) 就任ごあいさつ(山田義男) 新収蔵作品の紹介(3) 春の洋画写生大会 お隣り韓国の古代文化を訪ねてみませんか(ツアー予告)
138号	6月1日	移動美術館'77 有田展の開催案内 新収蔵作品の紹介(4) 木下雅子の作品を中心として— 第15回県美術家協会展開催要項 自分の車輪を進めよう(斎田武夫) 「韓国の歴史と美術を訪ねる旅」参加者募集 県立近代美術館友の会役員きまる 県立近代美術館友の会展開催要項
139号	7月1日	新収蔵作品紹介(5) 県立近代美術館友の会展 昭和52年度県立近代美術館第Ⅱ期常設展「日本画の世界—下村観山・日高昌克・野長瀬晩花・亀井玄兵衛・小野竹喬・稗田一穂—」 第31回県展審査員運営委員きまる 県立

近代美術館協議会委員川瀬浩一氏逝去

140号	8月1日	財団法人川端龍子顕彰会の由来(岡畑幾之助) 第31回県展開催要項きまる
141号	9月1日	川端龍子画伯の思い出(堀内喜市郎) 川端龍子展出品作品きまる 裕伊之助画伯逝去 友の会洋画部写生旅行「神戸の異人館を描く」
142号	10月1日	川端龍子展開催にあたって 父龍子(川端紀美子) 寛政期の蘆雪画(和高伸二) 片桐牧雄氏の死を悼んで(鈴木善次郎) 友の会美術鑑賞バスツアー
143号	11月1日	昭和52年度新収蔵作品紹介(1) 野長瀬晩花「一茶遺跡と四季句集」輝く県文化三賞「益山英吾氏と海南黎明カメラクラブ」 県展日程表
144号	12月1日	第31回県展輝やかしい記録から韓国旅行を終えて(和高伸二) 古都めぐり韓国旅行〈1〉(奥鈴雄)
145号	1月1日	年頭に寄せて(堀亨) 年頭に憶う(玉井一郎) 新人に期待をかける(斎田武夫) 1978年の近代美術館主催(共催) 展案内 友の会新春交歓パーティ 古都めぐり韓国旅行〈2〉(奥鈴夫)
146号	2月1日	和年52年度新収蔵作品紹介(2)
147号	3月1日	昭和52年度新収蔵作品紹介(3) 日高昌克画伯のこと(堀内喜市郎) 野呂介石展について(酒井哲郎)

### ○「友の会活動」

和歌山県立近代美術館友の会は、アマチュアの美

術愛好家で組織され、年間を通じて、県民の美的素

養の向上に寄与する諸活動を行っている。昭和40年10月発足。53年3月末現在会員数は1,135人（一般会員1,067人、賛助会員68人）。

（註 行事名、期日、〈テーマ〉、講師、参加人員の順に記載。）

〔美術鑑賞講座〕

- 4月17日 〈仏教文化展見学〉 山本武一 10人
- 5月8日 〈西大寺の文化財見学〉 三木哲夫 14人
- 6月5日 〈唐招提寺鑑真忌見学〉 三木哲夫 23人
- 7月17日 〈新資料の紹介〉 和高伸二 12人
- 9月11日 〈ピラネージ版画展見学〉 平岡学芸員 7人
- 10月20日~23日 〈韓国の歴史と美術を訪ねる旅〉 和高伸二 26人
- 11月3日 〈川端龍子展について〉 三木哲夫 26人
- 11月20日 〈エルミターージュ美術館展見学〉 和高伸二 50人
- 1月8日 〈新収蔵品の紹介〉 和高伸二 10人
- 3月12日 〈野呂介石展見学〉 酒井哲朗 25人

〔洋画実技講座〕

- 4年10日 〈桃畑のある風景を描く〉 浜田邦男 31人
- 5月8日 〈春の洋画写生大会〉 橘喜久雄 浜田邦男 42人
- 6月19日 〈初夏の街並を描く〉 八幡三郎 36人
- 7月3日 〈静物画〉 松下英雄 29人
- 8月21日 〈夏景色の粉河寺を描く〉 斎田武夫 佐原光 32人
- 9月24日~25日 〈神戸の異人屋敷を描く〉 倉田純三 42人
- 10月16日 〈土入川の秋景色を描く〉 山本龍昇 29人
- 11月20日 〈晩秋の根来寺を描く〉 鈴木善次郎 26人
- 12月11日 〈静物画〉 山東好雄 24人
- 1月8日 〈魚のある静物〉 仙石光重 37人
- 2月19日 〈魚のある静物〉 小川英夫 29人
- 3月19日 〈コスチュームの婦人像を描く〉 宮村泰彦 38人

〔日本画実技講座〕

- 4月29日 〈写生と制作〉 古村徹三 31人
- 5月8日 〈山水画の基本〉 寺口関山 49人
- 6月12日 〈 " " 〉 " 47人
- 7月10日 〈 " " 〉 " 54人
- 8月14日 〈 " " 〉 " 37人

- 9月24日 〈根来寺附近の写生〉 " 32人
- 10月30日 〈山水画の基本〉 " 39人
- 11月20日 〈花鳥画の基本〉 青木虹興 39人
- 12月11日 〈 " " 〉 " 42人
- 1月8日 〈 " " 〉 " 38人
- 2月19日 〈 " " 〉 " 46人
- 3月26日 〈温山荘の写生〉 " 31人

〔写真実技講座〕

- 4月10日 〈紀北春のモデル撮影会〉 全写連県本部委員 12人
- 4月24日 〈月例コンテストと作品指導〉 駒木根紅花 10人
- 5月29日 〈月例コンテストと作品指導〉 西川高三 11人。〈田園風景と浜の夕景を撮る〉 西川高三 12人
- 6月12日 〈月例コンテストと作品指導〉 西川高三 10人
- 7月10日 〈月例コンテストと作品指導〉 西川高三 10人
- 8月21日 〈月例コンテストと作品指導〉 西川高三 9人〈室内照明によるヌードの撮り方〉 西川高三 21人
- 9月18日 〈月例コンテストと作品指導〉 西川高三 12人
- 10月16日 〈秋のモデル撮影会〉 全写連県本部 10人
- 11月20日 〈月例コンテストと作品指導〉 島村安彦 10人
- 12月11日 〈月例コンテストと作品指導〉 亀忠男 10人
- 1月8日 〈月例コンテストと作品指導〉 亀忠男 10人
- 2月12日 〈雪の湖東を撮る〉 亀忠男 10人
- 2月26日 〈月例コンテストと作品指導〉 亀忠男 10人
- 3月19日 〈月例コンテストと作品指導〉 亀忠男 12人

〔陶芸実技講座〕

- 4月10日 〈楽焼による初歩の陶芸制作〉 山本学 26人
- 4月17日 〈電動ロクロによる陶芸制作のテクニック〉 柏井良夫 6人
- 4月23日 〈焼成〉 山本学 30人
- 5月8日 〈楽焼による初歩の陶芸制作〉 山本学 32人

- 5月22日 〈電動ロクロによる陶芸制作のテクニック〉 柏井良夫 4人 35人
- 5月28日 〈焼成〉 山本学 35人
- 6月5日 〈楽焼による初歩の陶芸制作〉 山本学 42人
- 6月12日 〈電動ロクロによる陶芸制作〉 柏井良夫 12人
- 6月25日 〈焼成〉 山本学 45人
- 7月10日 〈楽焼による初歩の陶芸制作〉 山本学 40人
- 7月17日 〈電動ロクロによる陶芸制作〉 柏井良夫 10人
- 7月30日 〈焼成〉 山本学 35人
- 9月4日 〈手造りによる陶芸制作〉 山本学 36人
- 9月11日 〈電動ロクロによる陶芸制作〉 柏井良夫 11人
- 9月24日 〈焼成〉 山本学 40人
- 10月9日 〈手造りによる陶芸制作〉 吉増達夫
- 10月16日 〈電動ロクロによる陶芸制作〉 柏井良夫 7人
- 10月29日 〈焼成〉 吉増達夫 40人
- 1月8日 〈手造りによる陶芸制作〉 吉増達夫 23人。〈電動ロクロによる陶芸制作〉 柏井良夫 3人
- 1月21日 〈焼成〉 吉増達夫 20人
- 2月5日 〈手造りによる陶芸制作〉 吉増達夫 22人
- 2月19日 〈電動ロクロによる陶芸制作〉 柏井良夫 4人
- 2月25日 〈焼成〉 吉増達夫 23人
- 3月5日 〈手造りによる陶芸制作〉 吉増達夫 19人
- 3月19日 〈電動ロクロによる陶芸制作〉 柏井良夫 5人
- 3月29日 〈焼成〉 吉増達夫 20人



## 6. 昭和52年度所蔵作品

### ○「購入作品」

1	石垣栄太郎	拳闘	油彩・キャンバス	75.2×91.3	1925	
2	"	失題	"	73.0×90.5	1949	
3	浜口陽三	猫	ドライポイント	6.5×9.0	1950頃	
4	"	うさぎ	メゾチント	15.0×20.0	1951	
5	"	ジプシー	"	29.0×29.0	1954	
6	"	雲	"	26.0×49.0	1958	
7	"	びんとさくらんぼ	リトグラフ	46.0×60.5	1971	
8	"	太陽	油彩・キャンバス	54.5×38.0	"	
9	"	貝	カラーメゾチント	12.0×12.0	1976	
10	"	さくらんぼと青い鉢	"	29.0×33.0	"	
11	"	蝶	"	16.0×16.0	1977	
12	"	8つのくるみ	リトグラフ	90.0×63.0	"	
13	秦テルヲ	吉原の女	彩色・寒冷紗	134.5×44.5	1920頃	
14	"	安来節の女たち	"	121.6×40.6	"	
15	野長瀬晩花	画帳 一茶遺跡と四季句集	彩色・紙	24.0×536.0	1942頃	
16	山口八九子	海近き畑	彩色・絹	138.8×50.0	1920	

### ○「寄贈作品」

1	裕伊之助	コルシカ島にて	水彩・紙	33.5×41.0	1921	滞欧作
2	"	遠眼鏡	油彩・キャンバス	41.0×32.0	1934	"
3	"	朝顔	石版・紙	74.2×53.5	1935	第22回二科展
4	"	大きなパルミエ	"	52.0×69.0	"	"
5	"	鐘楼	"	50.0×65.6	"	"
6	"	夏の夜	"	40.0×29.0	1956	
7	"	スイトピー	油彩・キャンバス	45.5×33.4	1962	
8	"	吸坂手九谷上絵鴛鴦中皿	陶器	径24.0	1972	
9	木下雅子	新緑	油彩・キャンバス	45.5×37.9	1927	
10	"	静物	"	53.0×72.7	"	
11	"	自画像	油彩・版	33.0×24.0	1930	滞欧作
12	"	A嬢の肖像	油彩・キャンバス	45.5×38.2	1933頃	第1回婦人美術協会展 第23回二科展
13	川端龍子	草描 白浜・円月島	淡彩・紙	47.0×69.0	1958	
14	秦テルヲ	桃割れの娘	彩色・絹	110.8×42.0	1916頃	

## 7. 所蔵品貸出状況

貸出先	展覧会名・会期	貸出作品	種別	点数
国立国際美術館	日本人作家のフランス体験 「青い眼・黒い眼」 —エコール・ドパリより アンフォルメルヘー 53.1.21~3.21	浜口陽三作 「ジプシー」 「あざみ」 「雲」 「魚とさくらんぼ」 「毛糸と編棒」 「黒いさくらんぼ」 「19のさくらんぼと1つのさくらんぼ」 「赤い鉢と黒いさくらんぼ」	版画	8

## 8. 県立近代美術館 協議会委員

氏名	住所
明楽光三郎	海南市日方582
川瀬 浩一	御坊市御坊79 (52.6.13死亡)
大岡 皓崖	和歌山市黒田168の9
楠見 勝寛	和歌山市新在家56
児玉 正之	那賀郡粉河町中山
斎田 武夫	和歌山市砂山南3丁目2番49号
島村 安彦	和歌山市磯山町4の2
杉本 義夫	新宮市船町2の6の6
高橋 正司	伊都郡かつらぎ町妙寺902
玉井 一郎	和歌山市寺町13
寺田 健治	和歌山市新堀北ノ丁3の40
富松 助六	和歌山市北坂ノ上丁1
尾藤 昌平	和歌山市新堀七軒町5
室谷 文男	和歌山市園部有功ヶ丘団地152-8
脇村正太郎	田辺市栄町52
(新任)	(52.12.2)
榎本 長平	田辺市新庄町377

会長 明楽光三郎  
副会長 室谷 文男

## 9. 県立近代美術館 職員構成

館長 堀 亨  
次長 山田 義男

(事業課)

課長 野口 照彦  
技師 松下 勝行  
学芸員 太田 将勝 (4.30退職)  
学芸員 三木 哲夫  
学芸員 仲田 耕三 (5.16採用)  
嘱託 和高 伸二 (非常勤)

(庶務課)

課長 吉田 禎之  
主事 西原 志郎  
主事 三宅 慎治

## 原勝四郎『滞欧日誌』について(Ⅱ)

学芸員 仲田耕三

Nobembre

le1 samedi Italie の事を想ふと夢の様だ。何にも分らない。Cannesはいいな。今日fêteで海岸の奏楽堂には音楽があった。明日は晴れないかな。Venve Allardに手紙を可く。

le2 dimanche 今日雨だ。今日はとうとう描かない。大変に幸福だ。これでAlgérie行の借金がうまく運べば此上の事はないのだが。しかしどんな犠牲を拂っても行くのだぞ。それにしても少うし気に入った絵をここで描いて行きたいな。

le3 lundi 描きたいな。餓死なんか嫌だ。おれとても何か描き残したい。

le4 mardi 今日は心の裡に石が在るとM<sup>me</sup> Micherineは言った。おお、おれもMarseilleを想ふと心がすっかり石になりさうだ。どうしてもしかしAlgérie迄はこぎつけたいぞ。哀れな奴だ。おれの当然在るべき處に在りたいぞ。一何處も耐らなかった。— そんなものは在るのか。在りとなれば餓死。これより外には多分在るまい。疑もなくmisèreだ。毎日いたづらしてる絵は何といふ哀れなものだ。今の態で何が出来るか。数年の後をまつと宜しい。しかしどうして生きて行かれるか。おれはおれの持って生まれた才能に就て全然失望したといふ事はない。しかし世渡りの道は余り知らなすぎ。おれは真面目にかう考へてる。餓死も拒まない。只寒さ丈はどうしても嫌なのだ。

le5 mercredi 陰天で風が強い。描きに出たが出来ない。悲しいな。道は尚ほるかだ。前には絶壁が立塞がってる。しかもおれは既に早く疲れてきつてる。どうなさるといふのか。糞！ 盗人を

やつてもよい。Algérie迄はこぎつけろ。明日は天気ならばCangne迄行って来よう。

le6 jeudi 明日はまたMarseilleか。もう擾乱の気持は沢山だ。想ふ丈で心が氷る。実際幾度くりかへしたとて憂苦といふものは新ただ。馴れるといふ事はない。おれは今Cangneを訪る為にテイ車場でまってる。怖ろしく悲しい。涙が滲み出る。Oh！ 自由と安静！ 終日Cangneで暮す。心に安静なくして何が見得るか。又怖ろしい不安が心をおびやかす。思断った気持はむしろ容易だ。どうしてもAlgérie迄はこぎつけたいと思ふと、心が重くなる。おれにはとても金をサイカクする才はない。Oh！ Marseille。明日は又Marseilleか。何故Algérieへ行きたいのか。寒くないからだ。おれはArabeになりたいのだ。煩雑な事は耐らないのだ。軽い衣をひっかけ汚ければ水浴をすればよいといったような暮を欲するのだ。そして未開の単純な心の女を見たいのだ。物欲しげな小賢い女などは見たくない。Oh pauvre rêveur！ 日本人相手の最後の努力か。おおもうRomaで精力はつきちゃった。憫軽侮と屈辱感をも背負ひきれないのだ。Oh Radda必ず新しいRaddaを見つけてそいつと共に棲むぞ。自分はどんな奴よりも無力で弱少だといふ自意識は耐らない。よろしい餓死する為にAlgérieへ行くと云ったとて他は相手にしまい。Marseilleでいよいよ借金<sup>(ママ)</sup>が出来ないとなれば、Marseilleの土になつた<sup>(ママ)</sup>へ。受けついでに一切の屈辱を皆受けてやれ。怖るるな。寒いといふのか。Algérieへ行けば苦痛なしに死に得るといふのか。馬鹿！ 餓と寒さはつきものだ。

かへると温い食物を供せられる。ここは安らかだった。どうしても絵描は一等よい。

le7 vendredi 朝Cannesを立つ。海を見ても何を見てもちっとも感じはせぬ。心重い。只々安静がほしい。M<sup>me</sup> Casse疑もなくおれはpauvre Mr Haraだ。しかしあのM<sup>me</sup>もpauvre M<sup>me</sup> Casseだ。汽車の中の不安さはどうだ。Marseilleで今一度やってみる気力はとてもない。夕Marseilleにつく。心怖れおののく。宿はふさがってるといふ。今夜は事によると眠る處がないかも知れない。Palais de Cristalには入る。腸も破れるばかり悲しい。此間の女神がいた。何で女神なものか。M<sup>me</sup>に会ふ。可愛らしい笑方をする。女から好感をうける程心を慰むるものはない。今夜は夜通し散歩かと想ったら宿が見つかった。今夜一夜は安らかに眠れるだろう。Raddaの手紙はおれを慰める。今日は世界はおれの心をおしつぶした。糞！ 明日はふみつけてやらうぞ。大和屋などで眠るよりはここの方余程よい。卑センなcompatrioteを見る程心を破る事はない。

le8 samedi金を才覚せうといふので全身石の如くに重かった。午後領事館へ行って金を可りる。井へ行ってスケッチを一枚売ってくる。とうとうAlgérieへ行けるぞ。悦び限りない。

le9 dimanche 箱を可ついで巡ったがとても忙しい気持では駄目だ。どうもsimpleなものにより興味もてない。野原へでも出なくては駄目だ。午後Palais Longchampを見る。おれの室は掃除をしない。Marseilleではいつでもかうだ。夜かへるとやっていた。これでよい。夕又何か刺激がなくては耐らなくなる。海岸の女郎屋町で女を見る。Palais de Cristalへ行く。例の女神に高い酒をのまれちゃった。冗談ではない。心を鬼にして借りて来た百フランが六十フランになっちゃったぞ。宿へかへると、女神も船子を引張ってやって来た。どうもいけな。Marseilleはどうもおれにとっては魅惑の地だ。Heleneを見たいな。

le10 lundi 船は今日出るとの事だ。さすがに胸が痛い。闘はうといふ心のなくなっているのは閉口だ。Marseilleへくると生命がほしくなる。矯飾の心をすてさへすれば生き易からうに。何をすててもVerité丈は投ち得ない。人間に貧乏をさせてはとうてい駄目だ。怖ろしいMarseilleだ。去らう。又声上げて号哭したい程も悲しい。安息。これ程の宝は在るまいに——。午後Cilletを可つ

てくる。耐らなく淋しいな。女の唇でも吸はなくてはやりきれない。何處に其女が在るのだ。Algérieと何のめあてがあるといふのか。ここでArabe達を見ると悲しくなる。おお、おれはFranceが好きだ。Marseilleも好きだ。それなのに何で去らななきゃならないのか。餓死それもよい。しかし淋しいの丈は耐らない。怖るるな。又想煩ふな。既にサイゴンでは支那船でデッキ・パッセンジャーとしてシンガポールへ渡らうと決意したのじゃないか。それから二年も経過してる。世間知らずのおれにはこれすらが不思議な程だ。絵も見た。女も見た。女のやさしい心をもうけてる。それでいいじゃないか。何を思煩ふのだ。しかし何とはなし心痛む。何とはなし憂愁感が心にしのび入る。酒をのみ女でも見たいが——。夜表へ出てcaféへは入る。女がいる。それ等がロクでもない奴の相手になってるとおれは憤激する。世のどんな奴よりも無力だといふ意識が耐らない。此意識の為に貧乏がつくづく厭になる。Afriqueに入らうといふのも此意識から逃れたい為だ。何で一息に思切つて了へないのだ。M<sup>me</sup>とAnnaとお袋とがやってくる。M<sup>me</sup>は英国の兵隊をつかまへる。かへりには知らない顔をして行く。おいおい賢い人artisteとコックやmécenicienや兵隊とどちらをえらむか。哀れな引張りにかへり見られようとならば後者の方よろう。淋しいには淋しいさ。しかし拙い絵を可いたとてartisteの方よい。M<sup>me</sup>はしかし可愛ゆいと思ふ。casinoへは入る。何を見たとて慰めらる筈はない。観る事が出来ればこっちのものだ。さすれば心も安かろうし、周囲から離れて其上から見下す事が出来る。かうなればartisteだ。物ほしく悩ましいのでは世界をあげておれを厭する事になる。こいつは耐らない。

le11 merdi 行こうと思えば行ける。やらうと思へばやれる。しかしおれの仕事はとうてい困難だ。悲しいぞ。既に絶望してる。行け行け。心を擾乱するもの少ない處へ行け。御前のグロテスクな面・貧乏・timideな心、これ等は女買や世間の人間相手には甚しく不適當のものであつても、仕事にはちっとも差支はあるまい。船に乗る。船に乗れば大洋も川の水の如く静かであつてくれと祈る奴だ。此弱い男に又如何なる難苦の途を歩めといふのだ。涙が流れるぞ。船酔にとつつかまる。風にふかれ、雨にうたれる。

le12 mercredi 終日寒さにふるへてる。夜Al-

ger につく。どうやら宿もとれた。今夜は静かに Radda の夢でも見よう。

le13 *jeudi* 起きて出かける。街はづれの岡にたどりつき眠る。もう行きたい處迄来たのだ。ここは美しい。出来る事ならここで生きていたい。しかし自分でどうせうといふ気力は殆どない。煩はしい事はもうとうてい耐らない。懐中は二フランだ。しかしそんな事は何でもない。心は殆ど空虚だ。おれ自らおれを動かすのはもう御了ひだ。fatalité 只それ丈だ。おれの生まれた時背負って来たものが今ここでたほれる事を命ずればそれでもよい。しかしここは美しい邦だ。ここで暮したいな。今夜は又土の上に眠るのか。それもよいが寒い。寒いのは耐らない。Radda に可く。思ふようにはかかない。死もいとわない。只寢床の上でひとりでなく死にたいな。今夜はどこへ眠るんだ。さすがに嘆くぞ。最悪の貴族主義者に、これは又何たる行路を与ふるといふのか。何で一思に自殺が出来ないのだ。晝眠った岡へ行行ってすこううつつろになった。岩陰に眠る。矢張寒くていけない。Radda に可いた。

le14 *vendredi* 意識が少うし躁くなって来た。パンをかひに行く気にもならない。身体に何か故障が出来たかも知れまい。よかろう。懐中に金がある間は生きなくてはなるまい。ものういがオランジュとパンをかひに出かける。かへって見ると岩陰へおいておいたおれの荷物がなくなっている。寂しいな。たほれるにしてからがせめてここ迄持って来た絵具箱と小数の記念物と丈は側へおきたかった。いよいよ *poche* に Radda の手紙が在るきりだ。全く孤りの感がする。おれは渴を覚える。パンは投げすてた。山羊が来てそれを喰っちゃった。さあ何が来るか。餓。次で死か。Napoli では死もいとわなかった。どういふものかここへ来て生命がほしい。今おれの心を慰むるものは婦人の心と野に咲く花のみだ。既に一切を思ひたっている。それでいて荷物を失くしたのが何でこれ程悲しいのか。寂しいんだ。おれの fatalité は笑ってうける。只寂しいのは耐らない。折角アフリカ迄渡ったのだ。たほれるならアラブの村で水一杯も貰ってたほれようと夕方出かけたが、アラブの部落らしいのは見つからない。淋しくなる。矢張 Radda の生地 Alger にせうとて引っかへす。明夜眠った穴に眠る。

le15 *samedi* 早く病気にでもなれと思ふがな

らない。餓を感ずるのみだ。何の想ふ處もない。終日同じ處で横つて。渴くが飲みに行くのが億劫だ。かかる苦痛はいやだ。運命よ速に病気をよこせ。餓、渴はもう既に充分に知つてゐるぞ。自殺も出来ないんじゃ生命がほしいに決つてゐる。生命をつなぐには恥は忍ばなくちゃなるまい。自殺が恥辱か。

le16 *dimanche* 朝八百屋さんだといふのが来て明日 *placeman* へ行行って見ろといふ。パンへ小魚をはさんだのを持って来る。又一人やって来て荷物をとりに来いといつてくる。警察迄とりに行く。煙草がのみたいな。よろしい。又一つ煙草の為に生きてやれ。荷物を持ってかへる。鏡がなくなつてゐる。忍んでると又其男がやって来る。これも *placeman* へ行けとすすめる。煙草をのまなくては勇気が出ないといふと一フランよこす。それで煙草とパンとトマトを買ってくる。おれもよくよくの変物だな。ここで孤りかくしていても、さう寂しいといふのだから厄介だ。何はなくとも野に花はある。山野は静かじゃないか。御前の *talent* と魂を少うしでも愛するなら今少うし我慢せうじゃないか。生きようとの意志があれば乞食したとて生きられようじゃないか。ここは美しい。其上に Radda の邦だ。明日は一骨おつて見る。おれとても郷国を愛する。母の在世のうちに何か土産を持ってかへりたいのは山々だ。しかしそれはとうてい難い。よろしい両親のなくなる迄またうぞ。何はなくとも野に花がある。又おれの郷国にはオランジュがある。

le17 *lundi* 寒くて眠りがたい。朝八百屋さんの御袋がやって来てスープを暖めたから喰へと言ってくる。*mairie* の *placement* へ出かける。同じ *misère* をそう幾度もくりかへしたかない。役人がペンキ屋の *adresse* をよこしやがった。ペンキ屋は巴里でコリコリだ。どうしても行きだほれより仕方がない。観念しろ。追ひかへされるとして生きてかへれるか。糞ツ。アラブに計時をうる。安飯屋を教へてやるといふのでついて行って喰ふ。安宿も教へてやると言ったが、散歩してかへって見るといない。今夜は家のうちで眠りたいな。病死は望む處だが中々病氣にならない。自殺は残念だ。少うし寒いな。通りかかりの男に宿をきく。只おれの處へ来いといふ。どこでもよい。一日でも生きてりゃいいさ。行って泊りこむ。

le18 *mardi* ペンキ屋は巴里でこりてるし、今

位地があった處で此懷ではどうする事も出来ない。昨夜泊って沖商人の處でしばらくいる事に決める。朝から酒と *café* で閉口する位だ。これも実に何ともいへない暮だ。しかし既に火夫付ボーイから初めて、*atelier cormon* で裸でも立った。*Odeon* で猿の如くにも踊った。ホテルの番頭もやった。最早恥辱を云為するは既におそい。何でもやれ。何を我慢してでもフランス迄はこぎつけろ。午後 *St George* 迄荷物をとりに行く。婆さんが大変悦んでくれる。嬉しいじゃないか。一体あの男はおれにどんな仕事をやらさうといふのだ。此調子なら楽なものだが。何でもいいや。

le19 *mercredi* 朝から酒くらって日南ぼっこが出来た。これだから *Afrique* はいいといふのだ。だが今に又何がくるか。何でも来い。穴よりはいいたって、板の上も感心しない。室も衣物もやるといふが、泥棒見たいな奴等のいふ事は当になったものじゃない。しかしおれの大好きな *France* の高肩の徒を見見るよりはむしろ、此モロッコ人相手の方心地よい。恐らくしばらくはやれるだろう。一寸おかしきぞ。今夜夜二時に船へ行くといひやがった。矢張ロクな事をしない奴かも知れないぞ。何でもいい。面白かろう。牢屋行にしてからが、中々普通じゃ入れてくれはせぬ。しかしそれだとすりや腰かけの上に寝て二杯や三杯の酒をのんだ丈で少うしソロバンに合はないな。よいよい。何にしてからが徳とれる奴じゃない。如何に惨痛の道と与へようと、世をあげておれを拒非せうと衆苦を一身に集めようと決してひるむな。*pauvre Radda* のいふ如く、おれ自身も *fiere* な資と共に如何に柔しい心の持主であるかをよく知っている。しかも運命がおれに与ふる處のものはこれ等とは極端に近似合しからぬものだ。しかしおれ一人じゃない。暗黒の世間から異端者として拒非せられた善き心の持有主はいくらも有った事だらう。悪も善も問題じゃない。おれにとっては仕事の出来ないといふ事が最悪の不徳だ。女を見ると惑乱する。世には可くも欲しいものがあるのにおれには許されない。むしろ何にもない處へ追ひやられた方が心は安からう。午後は公園迄行ってくる。かへっても飯を出さない。天気模様が怪しいぞ。日本船へ密輸入をやりに行くなどといったとてそりゃ駄目だ。そんな事もあるまいと思ふ。何でもよい。牢屋へほうり込まれたいな。世界一の弱者だといふので、ふるえ上つてゐるのなどは耐

らない。一定の時間働いて、きまった時に喰って、眠る時にはワラの上だつてよい。とに角家の中で眠らしてくれる處はないか。砂漠の中のお城の中にキレイな娘でも持つてゐるアラブの豪族なんといふのはもう無い時勢かも知れん。しかし近頃の連中すらがアラビヤ風の室内などを描いてゐる處を見ると、どっかに此處の土俗の生治はあるに違ひない。しかし何が何だか一向見当がつかはせぬ。實際余り忙だしい暮では何一つ見る事すらも出来はせぬ。まだ絵で見るような *danses* すら見た事はない。*Dlelacroix* の描いたようなものはどこにあるのだ。おれの見当は少うし内地へは入り込んで、番人でも百姓でもやってしばらく人事を離れようといふ寸法だったが——どっかには在るに相違ない。しかしそいつを見つかる以前に何とかなつて了ひさうだぜ。Radda は *Algérienne* なるが故に好きなのじゃない。可愛らしいから好きなんだ。初っから分つてゐる通りだ。絵の材料としてはとに角未開国の女などは難有いものじゃない。牢屋へ行きたいな。牢屋へ。世に牢屋より外に安息の棲屋のないといふおれも余程の変りものだな。

le20 *jeudi* 何だ。船へ行くなどといつて、行きはしないではないか。何にもする事はない。仕方がない。ぶらぶら出かける。*Musée* が此間海岸に在ったと思ふので歩いて見たが見つからない。技芸学校の前でカルトンをさげてる女の子供にたづねると、ずっと山の上だといふ。疲れてるので、想ふ事が甚しく悲しい。女の子供が三人怖れげもなく応へるのを見ると優しい心でいっぱいになる。フランスはおれの魂の祖国だ。さればこそ、そこで賤民のみにより接し得ないといふのでは耐らなくなるのだ。家へかへって午食を喰つても、只で喰つてはうまくない。心づかいで多くては駄目だ。想煩ふな。おれの方から頼んだのじゃない。向ふで来いといふからやって来たのだ。何を期待してゐるのかは知らないが、さう無暗に気を兼ねなくて向ふでも迷惑なら出て行つてくれるといはないではないまい。其時迄はかうしていろ。さうだ懐がなくなったから哀しいんだ。想煩ふな。世間といふものはおれの考える程もせまいものじゃあるまい。おれの裡に少うしでもよい *carité* があるならば、まさかそれに報ゆるにさう非道い最後を与えぬまい。*Marseille* を想ふとなつかしいな。しかしここはいい。はるかに心安い。 *compatriote* がないから。糞ツ。今に奴等の前で本当の乞食

をやって見せてやろう。しかし言葉が充分になってからでなくては駄目だ。いかなる恥辱を忍んでも言葉文はこぎつけろ。

le21 *vendredi* 朝carte d'identite をとりに行くと手数料が要るといふ。又くると言って引きさがってくる。とに角おれの地位は甚だしく個人的でparticuliaire だから困る。おれとしては必然だが、他にはとても不思議なのだから六ヶ敷い。睡眠不足で睡くていけない。精神が甚しく重い。昨日はMuséeを見た。ロクでもないものばかりだ。大きなつまらぬ作品の中でPuwisと Dlelacroix のクロッキーが大変に心を慰める。芸術とはどんなものか。おれとて少うし知っていると想ふが——。午前散歩する。女の家らしいを見た。女の側で半日眠りたいな。小使錢五フラン要求する。仕事初めに船へ金をとりに行く。何でもいいや。今夜は安い女でも見てやれ。どうにも情ない気がするのをおさえ得ない。どうしても未来を想へない。夜女を見に行く。さすがに此處は氣持がわるい。未開人だとしてかもう事ではない。只気に入った奴でないと困る。

le22 *samedi* 喰はないでもいい。寝てるのほうがいいといふ氣持がどうしてもものかない。生きて行く目標と慰といふものが全くない。明日を想ふ心は殆どない。とに角おれのいる處として余り不似合じゃないか。刺激と慰安を求むる烈しい思、おさへがたい。衝動と慾求とに悩まされるのみだ。船へ行って船長と話す。夜になると女を見たい。

le23 *dimanche* どうも先生達のゆっくりしてるには感心だ。八時だといっておきながらもう十時半になるにまだ来ない。室を持ち得る迄はこぎつけろ。あせるな。とに角營養が足りれば何かしないではいられまい。やるには準備が足りない。少うしまとまった金が入る迄はしかし我慢しろ。第一が孤りいるべき室だ。室を得て描く為の道具をととのへ、少うし氣に入った女が見つければ、ここは悪い處じゃない。ノンキなものだ。たったあれ丈の仕事をしてかうして毎日ブラブラしてられるのだ。余り文句いふな。いい陽氣じゃないか。そして海の側だ。ゆっくりかまへろ。

le24 *lundi* 今の處は、室を持って、夜は燈の下でささやかなスケッチでも見るのが唯一の目標だ。神経の余りに弱い奴は悪党だぞと叫んで、腹をきめてやうやく一人前になる。今日は船へ金をとりに行く。余り面白い仕事じゃない。夜船の連

中について女郎屋を見に行く。見事な奴がいた。しかしそれがどうなるといふのだ。おれは只一人のconsolatriceがほしい丈だ。

le25 *mardi* caféへは入る。馬鹿に高くとりやがる。Marseille で女を見ればこれも高くとりやがった。破れ汚れた衣をつけてる人間を、まさか金持とも見はしまいに、どういふものか、余程ボンヤリして見られるのだらう。心の騒ぐ事は、しかしそりゃとてもさう都合のよい事はありはせぬ。未開人はおれの性に合ってる。まあ追出される迄は我慢しろ。主人は極大マカな利得のみを考へてカン定を知らない。日本人の方はカン定は怖ろしく細かい。其間へは入るおれこそ迷惑千万だ。船の先生と主人と三人で市場へ行く。主人はおれは彼の犬じゃないと言って怒って行ってしふ。船の先生は言葉が分らないからついつてくれといふ。それで結局実に耐れない目に合って一文にもなりはせぬ。これがおれのfatalitéだ。公園で休む。世には美しい女がいる。それが何だ。とうていおれとは交渉はありはせぬ。ほしいと想ふ心よりは、此喪心の状態の方余程心安い。おれのcompatrioteはどうもsauvage な上に神経がにぶくていけない。よろしい。とても金なんかもうかる奴じゃない。生きてさへいりゃよい。出来る文手を抜いてやる事した。實際生きてる為支拂ふソ税は余りに重い。拂ひがたい憂鬱感が心をおほふ。どうしても慰めがほしい。眠るのは楽しい。死はもっと安らかだらう。思ふ事、其緒にもつきはせぬ。何よりも言葉を覚えなきやならないに、想煩ふ事が多いと何をきいてもとても耳に入らない。そりゃ穴よりも腰かけだとして、家の中はよからう。しかし孤りである室で寢床の上で眠りたいといふ願位は、そうゼイタクなものではあるまいと想ふ。今日は疲れたのだ。實際compatriote の賤民を見るとよくない。いいさ、明日は休養だ。

le26 *mercredi* とうとう熱が出やがった。終日眠る。病気の方、心が安らかだ。おれは余程妙な奴だ。實際compatriote はいけない。おれは彼等のうちにvéritéを見る事が出来ない。それに似たものは在っても根のない影だ。

le27 *jeudi* 熱は去った様だがどうも氣分が勝れない。とに角いつでも三日より上は我慢の出来ない處へばかりおかれるのだから耐らない。食事にデセールがつかなくなって来たぞ。病気になってまいった方一番いい。心が喘ぎ出すと耐らない。

何をやっても耐らないには極ってる。今の處はノンキはノンキだが金が入らない。せめて言葉の勉強でも出来ればよいが。時間はあり余っても此態ではむつかしい。無暗と酒をのます。おれは酒なんか余りのみたかない。金にならないたつて殆ど何の役にも立ちませぬのだから仕方がない。それにしても主人は、割合大事にあつかうノンキな奴だ。

le28 *vendredi* cabine で紙を使ふなといふ。野蛮もよいが、かうなると一寸困る。小使錢がなくなつた。肉屋へコムミッションをとりに行く。五フランよこした。鬼となつても生きる。親の死をまって故郷へにげ込むのだ。午後市外のテイ車場へ行って日本語を話す男といふのに会ってくる。少うし氣分がよくなった。先づ仕方がない。とても当分は絵も学校行もむつかしい。孤りで本をやるさ。いつもRodinの“L'art”をさげて歩く。これを持ってると心強い。街へ出ると心迷ふ。どうしても、たてこもるべき室がなくてははいけない。当分は何もかも思ひきれ。

le29 *samedi* 船がは入る。いよいよ番頭としてかせぐ。夜は船長の御供をしてcasinoを見る。よろしい。一步進んで殆ど一步退いても又前へ行け。どうせ魂が土まみれになる。そいつを洗ひ洗ひして進むより途はない。

le30 *dimanche* 昨日から大分働いてやった。全体いくらよこすといふのか。明日は一つゆっくりやりたいな。靴の底を張り、水絵具でもととのへたいな。夕親方に金くれといふと、手前には用はないといふ。暇とって出る。どうせかうだ。どうでもよい。今夜は床の上でゆっくり眠れるだろう。

#### Decembre

le1 *lundi* スケッチ箱を持って出かける。出来はせぬ。夕caféへ行くと親方が矢張居れといふ。余り都合のよい事ばかりも望めまい。ここいらで我慢せうといふので又舞ひ戻る。我慢しろ。そして本を読み。途の為だ。土間へ眠ったとてまだ家の中なら難有いとでもしておくさ。

le2 *mardi* 悲しいな。おれはよくよく室とは縁のうすい男だ。諏訪以来、余程物置に縁があると見える。日本を去つてより二年余、とに角一人前の寢台に眠つたのは一月二十四フランのhôtel du Calvadosの半年ばかりの間だ。ほんに僅かの

願望すら充たされるには永い間の時が要る。よからう忍ぼう。今一ヶ月様子を見る。とうてい駄目と見当がつけば、もっと南へ去ろう。午前散歩に出る。買女らしいのが煙草をくれといふ。面白いな…。一寸通りすぎに見ても、おれの心にこいつは好きな奴だとすぐに感じた奴は、たいてい間違はない。可なりに貧しげな奴だが、おれの持つてる“l'art”を見て御前はpeintreかといふ野郎なんかどうでもよいが、女丈はどうしてもフランス人がよい。おれの持つてるsincéritéはたいていの女共には笑ふべきものだ。これをうけ入れる奴をいつも見つけてるのだ。Hélèneは此点でどう考えても好きだった。Mélèneも思ふと可愛らしい。れいの女神などは一寸困る。Algerienneなどは絵の材料として見るべきものだ。l'amourにはどうしても精神的条件が必要だ。午後は道具を可ついで巡る。もう絵具も足りない。可々ないでかへる。夜間でも言葉だぞといふので可々るがどうも駄目だ。まあ永生するものとして、何事も死ぬ迄に思ふ事の万分一出来りゃよいとしておくさ。此間女郎屋を見に行ったら、ボルドー生れだといふ見事な奴がいた。しかしおれは肉を求むるのじゃない。よろしい。今度金が出来りゃ今日の奴を見てやろう。おれは哀れなうす汚い女なんか見たかない。しかし誰が相手になるか。引張りでも探しに行くより他には途はあるまい。pauvre gosse!今の暮しは楽には楽だが、余りいい事はないぞ。心配する事はない。どうせ永い事はない。實際嘆息するぞ。どうも室丈はほしいな。眠れば分らないようなものの、あれは余り情けない。今少うしおちつける仕事がないか。Mlle Charuouxが書いてよこしたBayonneでの様な仕事はないか。人足や石割は余り情ないが、何か少うしは興味ある仕事で一日八時間働き、夜は安息といふ寸法に行かないものか。此處はいい處だ。とに角少うしは未来といふ事を考へ、無理をしても少うしよい處を探しあてるのだ。とに角、もがいたとて仕方はないぞ。暖かい上に食事にはデセール迄つくじゃないか。巴里で在って見ろ。今頃はもうふるえ上って死んだ様になってるぞ。寢床が情なきや、いい夢でも見てつぐなひをつけろ。手紙の返事が馬鹿におそいと思つたが其答だ。便船は毎日あるのじゃなかったっけ。さうすると一寸ヘンピへ来てるのだな。

le3 *mercredi* 想煩ふな。どうとて見当

をつけたとて其通りにはこぶ奴じゃない。いつも親切な運命の命ずる通りに動きさへすりゃよい。陰天だ。何とはなし悲しいな。一人で生きてるのはイヤだ。しかし言葉は分らず喰って行けない人間の御ヨメに誰が来るか。何事も言葉が分ってからの話だ。先生何年先の事だ。気が短いぜ。

le4 jeudi どうも文無しになると何とはなし面白くも何ともない。起きる気にならない。さめると午後の二時だ。パン一片とコーヒー丈では耐らない。煙草ものめないのでは生きてる気もしない。うっとうしい気持だ。精神がボンヤリしてる。

le5 vendredi 何とはなし甚しく憂鬱だ。親方に煙草代をセイ求スル。こんな暮も決してよい事じゃない。一体あの親方は何でおれをおいておくのだ。邪間になるかと言ってあいつの為にはなりはしないに。おれがここで商人になって、あいつの顧客を失ふ事を怖れる為か知ら。酒はのんでもあれも世智辛さうだのに。貧しいものを煩はすのは面白くないな。利害の関係を離れて、おれを引きとめておく理有はない。少うし神経衰弱の気味だな。山の上へ行って一眠りしろ。少うし身体に故障でもあるのかも知れまい。いかにもものうい。気の弱い男だな。向ふでいらなくなれば何で遠慮するかい。出るといふ迄おればよいではないか。

le6 samedi 午前は公園へ行ってRodinとMaupassant とを少うし読む。午後は箱を可ついで出かけて、いたづら書をする。夕食後、街を散歩する。心地悩ましくなる。街へ出て女を見るときいけない。世界一の貧民かの如くに感じられるからだ。耐らなく淋しくなる。怨恨とmalicieuxな心とでいっぱいになる。絵の展覧会へ一寸は入って見る。公衆といふものは少くも芸術の方面から見ても、決して賢いものじゃないな。孤りで静かに考へたいな。しかし故郷へかへって、山崎の二階でそれが出来ると想ふか。想ふだに淋しいじゃないか。何故おれの祖国はかく迄に寂しいのか。ここはよい。Franceは海を越してすぐ彼方にある。少うしジュン備さへ出来れば何時でもかへれる。此暮しでも沢山だ。せめて二三年はつづけたいな。つまらぬ友はなくともよいが、全く孤りでは余りに淋しい。何で手紙が来ないのか知ら。疑もなくこれは耐らない。しかし耐らない事を少くも三年は我慢しなきゃ芽は出ない。死か生かだ。耐えられなきゃ死ぬより他はない。男として何の土産も

なしき、生きて祖国の土をふめるか。

le7 dimanche Muséeを見る。淋しいな。このMuséeはSalon d'automneといふのがあるからは入って見る。これは又ひどいものだ。悲しくなる。街へ出ると昨夜はどの女もキレイに見えたが、今日はどれもこれもロクな奴じゃない。又人々の魂の貧しさうな事は実際寂しいな。午後は箱を可ついで出かける。夜は本を読む。感心な事には相違ない。しかし何とはなし面白くない。こんな事して偉い奴になるよりは盗人してでもよい。三日でもよい。可愛らしい女の側にでも寝て後死んだ方マシかも知れまい。何で手紙が来ないのか知ら。

le8 lundi mistral がふいて寒い。想ふ事哀しい。手紙がある。児島氏と青山とからだ。兄弟からの消息が入ってる。いけない。親の家の廻想は心を怖ろしく冷くする。家も親もないと想へ。父祖の墓に入る程ならここでアフリカの土となれ。青山の消息も余り難有いものじゃない。何故にRaddaは可々ないのだろう。来ると想ふが主人はこれ丈よりないといふから仕方がない。破れたる心といふものは中々つくろいが無いものだ。いつも熱でたほれでもした方楽だといふ気持がはらひがたい。本を読むのはいいが、金と自由がないと心持が何となく空冷で活力がない。憂鬱な気持は決して真当じゃない。午後箱を可ついで出かける。すっかり疲れて了ふ。Rodinに感心するのはよいさ。しかしRodinはOdeonで踊ったりAtelier Cormonで素裸で立ったりはしなかったらう。しかしおれはおれのtempéramentでやり得る丈の事はやって見せるぞ。夜長谷川からの手紙をうけとる。Micherineの短い文言が一番よい。これで一先づ方々からの返事がついた訳だ。Raddaのもきつとついでる事と想ふが、主人は気がつかないでしまっておいてる事と想ふ。何にしる言葉が不自由だからだづねるのがおおくうだ。

le9 mardi どうも朝起きるのがものうい。何の為に生きてるのか張合がないからだ。今日は陰天で少うし寒い。殆ど終日引きこもる。

le10 mercredi 日本船がは入ってる。主人に会ふと髯をそれと言って五フランよこした。船は食糧品をとらなかつたといふ。アテにはならない。此五フランはワイロの意味じゃないか知ら。おれが八百屋さんになるのを怖れて、おれを只喰はしておいて、それをケン制するものだとすると、可

哀想だな。今日只一瞬の安、そして明日と未来にはいつも死と絶望とがかまへてる。悲しいな。その上に貧しいものを煩すのもイヤだな。しかし向ふから追はない限りはいよう。向ふの真意は解らないのだし、大乘の見方よりすりゃ、おれが善事をなすに於ては何人の報謝をうけようとかもう事はない。午後Musée Nationalを訪ねる。antiqueの彫刻に見事なのを見た。少うし淋しいな。又Baudelaireの咏った旅人の心がうごくぜ。しかしRaddaの返事のくる迄まで。いよいよ真に生か死かといふ處迄行くのでなくては、結着がつかぬといふのだ可ら厄介だ。

le11 jeudi どうも朝起きる時張合がない。午後箱を持って出かける。vert Emeraudeがなくなった。どうする事も出来ない。此奇妙な暮も大変に不安だ。又熱風が吹きさうだ。Allons !とどっかで叫んでるぜ。兄きに手紙を可く。

le12 vendredi 非常にものうい。又日和が少うしどうかしたのだ。何かmotifが在ると何とかなるだろう。晝寝をする。さめると非常に気分がわるい。夕波止場のサキへ行行って魚ツリを見る。いい気持であるべきなのに一向心悦ばない。人間が一日誰とも話さないで暮すといふのも本当じゃない。淋しいのだ。consolatriceがほしいのだ。此死んだような気持は耐えがたい。夜は降りた港の煙火の美しさはどうだい。人は皆おのおの安息の宿がある。何でおれひとりのみ安らかにいこう處もないのか。夜少うし氣力を恢復する。Algerについてより丁度一月だ。今度は割合日のたつのが早いな。此暮しもよいがどうも一寸奇妙だ。もっと寂しい處へ去らう。ユ一窓の少い處の方よい。暮しの為とあれば働くのは仕方がない。夜と日曜の安息さへありゃ沢山だ。せめて少うし心を慰めるものと言葉を覚える方便と水絵のスケッチでも出来る丈の暮しがほしいものだ。室と椅子とテーブルがほしい。

le13 samedi 今朝少うし早く起きる。少うし氣力が出来た。espritがさめると世界といふものはどの位よい處かと想はれる。永生をしたいな。處で此少うし心の軽いのは、去らうといふ氣があるからだ。pour partir coeurs légers semblable aux ballons! 糞! 何といふまいましいBaudelaireだ。巴里には何にも心残りはないが、Académieの女共を想ふと、一寸なつかしいな。Mlle Pauleはショイ投をくったからどうも余り

香ばしくないが。同じくショイ投に近くともMlle Madoは想出すと可愛ゆらしいな。Mlle Bernardもキライじゃないが、少うし男の子見たいな處が困る。Mlle Madoはいかにも可愛ゆがられて育った女の子らしくて可愛ゆらしい。他愛もない奴だ。手紙の可き出しにcher camarade HaraとMrなしで可々れたのが、camaradeと呼ばれたのが、光荣だと涙を出して悦んでる。Académieの隅っこでいい加減つかれて帰りたいのがいっぱいなのに、Madoの前を通るのが怖さにベンカいてひかへると、Madoの方からやって来てca vaといって手を出されると、声が咽喉につまんで出なかつたじゃないか。それ程も難有い目をしてるのだ。此世に想ひ残す處もない筈だ。Rodinのいはゆるetresejn de fermisをやつて来た。何? de véritéとelre hommeはまだだと。馬鹿conscienceのない奴程の馬鹿はないといつもロクセの様にいふのは何奴だ。conscienceのかけらでもあれば後の二者は想切つたへ。

le14 dimanche 夕方散歩に出て魚ツリを見てくる。想ふ事もない。

le15 lundi 少うし腹をいためたと見える。終日気分がすぐれない。夕は魚ツリを見に行く。今日で仕事なしも半月だ。少うしタイクツだな。金がないとうっとうしいな。青山可ら消息がくる。compatrioteの手紙なんか難有くない。あの男も絵描には出来てるが、可愛相な事には頭がわるいな。

le16 mardi 腹工合はよくなった。午飯を喰ふと眠くなる。午睡をやつてさめると出かけて魚釣を見てくる。かへると昨夜いたベルヂッタの喰ひっぱぐれのgosseが又来てる。こいつもParisの引張かなんかの写真をMa femmeといって取出して見せる奴だ。御仲間だ。どうで今日はロクに喰っちゃいまいと思ふがどうにも仕方がない。おれ自身も煙草を吸切つて懐中は十五文だもの。又親方に小使銭を請求するのもイヤだな。日本船でもは入らないか。船がは入ると親方も小使をよこすから。明日は煙草も吸へないな。ゼイ沢をいふな。我慢して本をよむさ。

le17 mercredi 覚めると十一時近くだ。煙草も切らしちゃつた。頭が甚重い。いくらでも眠い。Mlle Bernardから手紙がくる。悦ぶ筈だが、まるで魂が落然としてるので読むのものうい。十文のシガーを買って吸ふ。これで人心地がつく。

夕は防波堤へ行つて魚釣を見る。毎日の日課だ。日として、しかし苦しまない日はないな。去りたいな。早く日本船がつけばよい。それをきっかけに去るのだ。

le18 *jeudi* どうも文無しの上に煙草を吸はないと恍々として楽しまずといふ風になる。頭が怖ろしく茫んやりする。身体はアカだらけだ。一体湯には入ったのは何時だ。ズボンはさけてくる。シャツの袖は切れる。そしてこれらを新調する金は先づない。ボロさげてでもよい。ずっと生活が保証せらるればよいが。今の所は怪しい。去るか。しかしもう少しまって見ろ。これでは人中がいとほしくもならうじゃないか。波止場の先が一番心安い。男の子見たいだなんといふものじゃないぜ。乞食見たいな人間をほんとうに友達らしくあの *Académie* の人中で手を握ってくれるのじゃないか。 *Mlle Bernard* には感謝しなくてはなるまい。此節はいつでも少うしひもじいな。とうとう雨になる。少うしタイクツだ。本も休業だ。煙草を吸はないとどうもゆっくりしないな。悦もなく悲しみも在迄の事ではなく、茫んやりとして時さへすごせばいいじゃないか。

le19 *vendredi* 陰天だ。アンズーでは仕方がない。終日腰かけによって半睡の態で暮す。居候も骨だ。中々呼吸もんだ。飯時が一等イヤだ。どうも無一文の上に煙草もないと来ては、うとうとして仕方がない。しかし我慢しろ。もう十日の處をここで正月をしろ。正月の元日から喰はないなどは余り景気が悪からうじゃないか。

le20 *samedi* 御主人に御伺ひしても、*café* の御ち走にもならないぜ。去らう。少うしまって見てね。正月は事によると野原でやる事になるかも知れない。おれの事はとても分らない。どうもタバコでも吸はなくては気分がうとうとうしくなつてやり切れない。午後散歩する。波がたかくて波止場迄は行けない。何だか怖ろしくなつて来たぜ。

le21 *Dimanche* どうにも文無しはいけない。*patron* に革皮をケン上げて五フラン頂戴スル。難有い事だ。これで日躍も出来るといふものだ。かうなると一晩でも難有いといふものだ。

le22 *lundi* 描きたいといふ衝動がおきたとてどうなるといふのだ。魚釣を見るのが一番楽だ。故郷へかへつて魚でもつて暮してはどうだい。事によると正月は野原だ。それもよからう。夜此間パン片をくれてやった小供がおれに茶をのま

した。金をやらうにも今の懐じゃ仕方がない。明日シャツでもくれてやらう。此小供に一人の仲間がある。此奴は他の奴よりはリコーさうな面してる。おれの様には苦笑する。そしていつも不満気な *mricieux* な面してる。しかし此二人がおれに一番親しい。どうも曲根性に生れてると見える。思ひきれ。此世は手前には不向に出来てるのだ。長谷川はかしこい事を言つて来たじゃないか。遠い異国に誰が *etranger* をまち受けてるか。しかし探しに行くのだ。パンを噛り、野に伏してさがしに行くといふのだ。

le23 *mardi Ecole des Beaux-Arts* を見つける。*model* につかうか、何か世話するかしてくれろと可く。どうせ当らうとは思はないが、かきさへすりゃ気がすもうといふものだ。今日も夕飯は頂戴出来ないかな。おれはよくよく聖者に生れてると見える。

le24 *mercredi* タイクツだ。今例によって防波堤の先で日南ボッコをしてる。故郷の春の様な日和だ。遠山がかすんで見える。おれも詩人になる。人なつかしくなくもない。竹村の奴、何で死にやがった。馬鹿な奴だ。又絶望感がやつて来た。

le25 *jeudi* タイクツを越して、今度はうとうとうしくなつて来たぜ。何にも面白くない。其苦だ。やりたい事、ほしいと思ふ事と今日の暮しとは余りかけ離れすぎてらあね。おれとてもやりたいが、どうも喰つた時の考と腹すいた時のとは、まるで違ふから耐らない。此暮もいいが、これがづーとつづいて行くものじゃない。当分他にも少しよいものがあるだろう。無くもよい。去るのも遠くはあるまい。淋しいには淋しいな。しかし *compatriote* から逃れたといふ丈でも幸だ。今日はどうしたといふのだ。心恐ろしくさわがしい。

le26 *vendredi* 今の處日和は一寸分らん。いいさ。ここ数日のうちに決るだろう。絵を見た。 *Midi* と *Alger* にはしばらく暮したいといふ希望、それ等は満された。皆思ふ事の百分一にも足りはしないが、これで御了ひじゃないのか知ら。御了ひだとすると、故郷へかへるか死んだふかだ。前者はやらぬとすりや、後者だ。しかしフランス人を御神さんに貰ふ、絵を残す、これはまだやってない。そしてこれは一寸の事じゃないとすりや、まだまだ永生は出来る筈だ。今日の気持のわかつた事はどうだい。夜やうやく人間になる。

le27 *samedi* どうも身心共に怖ろしくだるい。消化不良の所為かも知れない。動くのがいやだ。暖かくして眠っていたい。午後夕方迄眠る。腸をいためるのは、夜少うし冷えるからだらうと思ふ。何にもしないでいると時は永いな。

le28 *dimanche* どうも朝起きる気にならない。好い天気なのに散歩に出て面白くも何ともない。他の理由じゃない。 *pas de sons* がかうするのだ。糞野郎夜は哀れな親兄弟の夢を見やがる。夢になりとせめてはもっと景気の良いのを見やがれ。 *France* で何をやったか。 *Italie* で何を見たか。 *Raphaël* や *Michelange* を見たと言えるか。フランスで旗をあげ、 *Italie* をほんとうに見るのでなくては承知出来ないぞ。それ等の望はとうていなしとすりや *Afrique* の土となれ。煙草を拾つて吸つてると隣の *Arabe* の兵隊が一袋のタバコをくれた。いよいよ乞食も卒業か。よろしい出かける。乞食で沢山だ。生きようと思へば生きられよう。糞どうしても死ぬな。此家は難有かつた。しかし止るべくもあるまい。行かう。 *Alger* も去らう。もっと淋しい處へ行かう。糞ノ海を喰つても生きる。生きて何かやるのだ。

le29 *lundi* 全く気力を失つてる。何にも面白くない。絶望感でもってふるえ上つてる。

le30 *mardi* 生命がほしい。困つた奴だ。生命がほしいとなると不要といふ時よりも悩みが重いのだ。そしていよいよ餓えなければ、動かうとはしないのだ。ほしいもの、為したい事はいくらかでもある。又いくらかもやつてはしない。しかし言葉覚え、相当の作品をつくる。少くも今後十年の仕事だ。十年はおろか、明日どうして生きるか。絶望感はどうていはらひがたい。午後岡の上の草原へ行つて眠る。死の如くに眠る。夕方になると冷々としてうす寒い。家にかへつて燈火の下に在ると、乞食の如き連中のうちといへども心安い。さあ又これすらが失はれるぞ。

le31 *mercredi* 今年も今日で御了ひか。丁度祖国を出てより三度目の正月を迎へる訳だ。いつもいつも惨タンたるものだな。ズボン下をうって一フラン得た。これで御正月も煙草を吸つてくらせる。しかし只生きてたとて何になるかとつぶやいてる。

Janvier 1919

le 1 *jeudi* 御正月を迎へた訳だ。晝食時に菜

物をつけてよこした。何よりの事だ。よろしい去らう。死ぬのまかまわらないが、今一度室で哀れな画を眺めてからにしたいな。

le 2 *vendredi* 考へるとドロ沼へ飛込んだよなものだ。ハ子の生へた天神でも降つて来なくては助りっこはないな。今日は陰天で風つよい。空想といふものはどんな勝手な *vision* でもこしらへられるからいいな。淋しい海辺に可愛ゆらしい魚師の娘がおれをまつてる。いいな。行け行け。 *vision* は消えた。處で一番悪く行つた處で死だ。手前は眠るのが好きだ。おれの希ふ事は一人前の奴は誰でもやつてる事じゃないか。おれ一人にのみ許されないとはいよくよくの能無しだ。とうとう半年自分の室といふものを持たないで暮しちやつた。乞食人足共のむさくるしい事はどうだ。又野の草の上へ行かう。何だ独りだ。いかにも外国だと。文無しで東京をまごつきやもっと外国じゃないか。文句を並べるな。魔王の *misère* だぞ。午後 *Musée* を見る。 *Venus* の *torse* と女神像はいつ見てもいいな。しかしあれ等を味ふには今少うしこちらの暮を引上げなくてはいけない。おれは田舎はキラリじゃない。一等真面目な気持の残されてるのは *marmeaux* じゃないか。行かう行かう。そんな人足共の湊はイヤだ。夜どうにも身体のかゆいには閉口するぜ。活動力をすっかり殺したふといふのも困つたものだ。猛獣とオリの中へおしこめられちゃ手も足も出なからうじゃないか。

le 3 *samedi* 朝からすっかり気力を失つてる。今一日のばせといふ事にする。眠くて仕方がない。午後山手の草原へ行つて眠る。風が吹いていけない。さて去るときめてから金がこしらへるのが一骨だし、主人との対応もイヤだ。夢想が消えると怖ろしいな。

le 4 *dimanche* 雨ふる。出る気もしない。終日一つ處に石の如くにじーっとしてる。耐らない気持だ。とうとう今日こそは煙草も吸はないな。方々ムズがゆくて不愉快なる事おびたしい。御湯へは入つて洗濯したものを身につけ、寝台の上で眠りたいな。今に見ろ。寝台はおろか、こっぴどいものがくるぞ。まてまて主人から出て行けとは言ふのじゃない。急がなくとも今に必然の *motif* がくる。

le 5 *mardi (lundi)* 他は知らない。少くもおれに於ては *malicieux* な心力でやうやく実生活を支へてる。おれは物的の *energie* といふものを

余り尊重しない。実生活といふものは、余り見事なものにはどうしても見受けがたい。今夜は *Al-liéh* はやって来ないなあ。乞食の兎見たいな奴が今のおれの唯一の友達だから面白い。汚いアラブの人足共も少々鼻につくが、フランスの人足にはつくづくカプトをぬいでるから我慢出来る。同じく人足のうちならまだ此方よい。

*le 6 mercredi (mardi)* おれはどっか可哀さうに出来てると見えるな。あのメッカチの独者の爺が一番おれをいたわる。彼奴には矢張おれと同じく、人中でオシのきかない性分が在るのだろう。それが、此男の生涯を *misère* のうちにおいた訳だ。可哀相に働きながら一人前の待遇をうけ得ない。腕をいためて働けなかった時には、恨めしそうな面して周囲を眺めていた。此頃は *place* を得た所為か機嫌がよい。おれを陰でいたわる。おれもつまりは此男だ。只それへ最悪のキ族主義者の血を交へた丈の事だ。早く船がつけばよい。ここももう沢山だ。 *Arabe* の中でフランス語を覚えようといふのも迂遠な話じゃないか。淋しくなくもないな。あの乞食小僧はどうしたかやって来ないな。多分兄が帰って来て少しはよくなったのだろう。

*le 7 jeudi (mercredi)* 矢張シラミがいるのだ。気がわるいがどうにも仕方がないな。どこからも消息が来ない。それもよかろう。只 *Radda* から一度もよこさぬのは不思議だな。どうもいよいよシラミだと思ふと耐らない。しよつ中なやまされる。何とか退治の方はないか知ら。シラミ位は何でもない。ほんとうはもっと大切な事で心配しなきゃならぬのだろうが、どうにも眼前の此シラミやお湯には入る事が先づ問題だ。しかしどうにも仕方はあるまい。気がわるいな。

*le 8 vendredi (jeudi)* 日本船がは入ってる。親方の處へ行つて見る。大した商売はないといふ。五フランよこす。まだいてよい。去る時には旅費をやるといふ。どういふ事かちつとも分らない。しかし今去つたとて困る。今少うしいてやらう。夕防波堤の上で一才 *calçon* をしらべて見る。かゆい筈だ。シラミの小供と卵がどっさり在る。どうもかなりエライ處へ飛込んだな。今朝初めにパンを持って来た。八百屋さんがペンキ屋で働かないかといつて来た。ペンキ屋もよいが、文無しではどうにもなるまい。よしんば何とかなつたとて、うまく行かない時にはどうせうようもあるまい。それよりは今少うしいて、親方にワラジ銭を貰つ

てどっかへ去る方かしこからう。ペンキ屋はパリでこりてる。何にしても此シラミが一等の問題だが、どうにかならぬか知ら。さあ一寸惑ふぞ。もうここは男としているべきではない。去るとしてだ、シラミの問題の解決法はペンキ屋となつてかせぐ事だ。しかし仕事がいつもあつて暮す事が出来るかどうか問題だ。よろしい。あのペンキ屋さんに聞いてみよう。それからの話だ。

*le 9 vendredi* 八百屋さんに途中で会つたが、矢張八百屋さんらしい。昨日言つたのは *peintre* として働いてるか尋ねたものらしい。防波堤の側で日南ボッコをしてると *mécanicien* だといふ奴がマルセイユでおれを見たと言つて話しかけて来やがる。どうもおれも野蛮人になつてらしいな。 *Ecole des Beaux-Arts* の前を通ると女画生が出て来た。なつかしいな。シラミの喰アドだらけの裸素を見せてやつてもよい。一度同業の可愛らしい連中のウチに在りたいな。 *étudiant* として在り得なければ、 *model* としてでもよいとはおれもよくよくの *pauvre diable* だ。さあいよいよ二三日のうちに去らう。又喰はないで寝て臥ていよう。今度は天使見たいな娘が新しい牛乳でも持つて来るのでなければ起きるのじゃないぞ。午後少きなものを描く。これで少しく気力が出て来た。行かう。シラミ退治もとても駄目だ。田舎はキラじゃない。どっかすみ心地のよい小さな處をさがさう。今度は居候とは行かなくともよい。働いてもよい。フランス人の中へは入りたいな。明日を想はない。朝は夕の事を想はない。思つたとてどうする事も出来ないからだ。何であの男がおれをかうして、只喰はしておくのだろう。利害を離れておれを憐むといふ程の智力があるとは思はれない。何か利益を期待するとならば、一体何に見當をつけてるのだらう。どうも分らない。

*le 10 samedi* もういるべくもないが、金の才覚がうるささに今日ものぼした。又夜はシラミに悩まされるのか。耐らないな。何處からも手紙が来ない。誰がさう他の事ばかり考へているか。こちらも一向かきたかない。夜 *Hasegawa* から消息がくる。

*le 11 dimanche* 臆劫だが主人に暇くれといふ。何故かといふから、ある男が仕事なしでいるのはよくないといったし、おれもさう思ふからといふと、さあ事だ。おれ以外に命令し得る人間はいないといふので、三人づれでやつて来て文句をいう。

可哀相に其男はふるえ上つてる。其奴は何も出て行けといふ意味でいったのじゃなかったのかも知れないが、横柄にぬかしたし、よい *motif* だと思ふので持出したのだが、これじゃ出て行けない。何もいそぐには及ぶまいが、しかしシラミがいかにもおれを悩す。日本船がは入ってる。しかし矢張おれの用はない。それでいて暇を出さないのはどういふものか。とても彼等の心はソソ度しがたい。出て行きたいな。汽車にのつて一日でもよい。田舎の宿へ泊りたいな。しかしシラミさへカイ決出来ればいてもよい。若しおれの疑心ハおれを辱しむるものであつて、彼等のうちにも困つた奴を助くるといふソソ陰の心が在りつりや、これ程の事はない。しかしおれはよくかひかぶる。容易に他を信じがたい。おれに衣服靴其他を与へるといつた。これも信じがたい。理由なく他を護衛する筈はないから。けれどもここを最悪の結果で去つても、あの親方には面白い印象が残されるだろう。

*le 12 lundi* 自由の感と夢想がおれを刺衝する。又困苦をうけて見たい。最良の取獲でもつてここを去らうといふので骨がおれる。主人に会つて話す。どうやら最良の結果を得さうだぜ。明夕七時 *Philippeville* に立つといふ事に話が決る。主人のいふ通りになるものとすればこの上の事はない。汽車の旅、そして夜はとに角宿がとれ二三日は暮せる。今夜は心がときめく。女でも見たいな。

*le 13 mardi* さて今日出立といふのだが余り都合が好すぎる丈に、今にまだあやぶまれる。いよいよ小使を頂戴し、切符をかって貰ふ迄は案心出来ない。今度は断岸の側へ行きたいな。今朝靴を頂戴した。午後は下りて行つて切符を買つてやるといつたが、まだ来ない。待つのはイヤだな。親方が来て切符を買つて五十フランよこした。感謝の意よりも此 *pauvre comeroaut* を煩すの悲しさが強くうごく。さて又何ともいへない旅だ。汽車は憂愁の心をのせて、終夜暗の中を馳るだろう。

*le 14 mercredi* いい天気だ。大して想煩ふ事もなく汽車の中にいる。これがしかしこんな旅じゃなく、絵をかきに行くのならどの位楽しからうに。ゼイタクをいふな。 *Alger* から徒歩で出発などといふのに比べてどの位幸か。ほんとうに *monsieur* をつけて呼ばなければならぬ。親方などといふに罰が当るぜ。夜 *Philippeville* につく。兵隊に宿を教へて貰ひ、女郎屋へついで行く。女は可

愛ゆらしかつた。しかし夜の眠りは安くない。夢は暗かつた。

*le 15 jeudi* 何を見ても駄目だ。おれ一人とり残された様な気持だ。怖ろしくてならぬ。 *Bône* 迄の汽車賃が残れば明日は *Bône* へ去らう。悲しいな。此世生きていたい意欲でいっぱいだが、さて其為はどうすりゃいいのかわれは知らない。此淋しい懷で五フランどっかへなくしちゃつた。煙草屋でくづす時少くうけとつたか、それともどっかでなくしたかだ。かういふ奴だ。此世がいかに好きだとして、御前にはそこでやつて行く能力は小供よりも少い。思ひきるのだ。夕散歩する。街はうす汚くて余り愉快ではないが、海岸には絵になる處が大変多い。此点では *Alger* よりも心地よい。ここで暮せるならばそれにこした事はあるまいが去らう。夜昨夜の女を見る。こいつは冷やかに見るとキレイな奴じゃないが、おれの好きな *carité* の奴だ。勇氣はすっかりなくなつて。心重い。自分の小さな絵を見て嘆息する。室にいて、ローソクの火でこれらの *croquise* をながめる。おお今夜かぎりだぞ。いよいよ此世を愛する。そして *douleur* はいよいよ大きい。漁夫や人足を見ると嫌悪の情でふるえ上る。富みて幸福な人々を見るととてもおれの仲間じゃないと嘆息する。一切はおれを拒非する。只自然丈がおれを暖める。しかし人間の中へ行かなくては、今のおれには生命のつなぎ様がない。どうしても天がおれに与へた資質と行路との間の甚しい錯誤を嘆かずにはいられない。うす寒い室にいてすらがかうだ。あすは家がないぞ。

*le 16 vendredi* 懐に「ス」でもある間は、マヌーヴルの中へなど行くのではないぞ。午後海岸で描く。出来はせぬ。何とはなく怖ろしく悲しいぞ。一体何處へ何を求めて行かうといふのだ。午後 *Philippeville* を立つ。夜 *Bône* に着く。ガケの草上に眠る。

*le 17 samedi* 今度こそはあぶなさうだ。怖ろしい日はどの位つづくといふのだ。河岸に至り終日眠る。夜の寒さとシラミとには抵抗しがたい。此街は余りいい気持はしない。

*le 18 dimanche* 意識やや不明瞭だ。水をのみに行く。どうやら矢張生きていたいらしいぞ。糞ノ働人に靴をうる。三十フランといふ處へ十五フラン丈渡して、夕方今十五フラン持つてくるといふ。どういふものか何にも望はなくとも、中々自殺と

いふものは出来ないものだ。夕、靴をかけた男のつとめている *pilote* の家へ行って其男のくるのをまつ。*pilote* は *gentil* な男だ。いよいよとなればこいつにもちこむのだ。人間一疋さうむざむざと死んでたまるか。靴の金をうけとる。これで今夜は宿とれるといふものだ。いくらひどい目に会はしても、どうもおのれの *situation* をほんとうに意識しがたい。おれがこんな目をしなくちゃならないのかとつぶやくのみだ。*voyageur* であるべきだのといっているから始末がわるい。

le19 *lundi Mairie* へ行って仕事を求める。*St. Paule* といふ田舎へ行って見るとの事だ。行かう。どこでもいいさ。醒めると怖ろしい。植民地なんておれのいるべき處じゃない。胸痛い。フランスへかへりたいな。糞ノ 嘆くな。何處へ行ったとて女位はあらうじゃないか。素人の百姓ノ そんなものを誰がやとうか。何よりも一等悪い事は今心に *sincérité* と気力のない事だ。嘆くな。十年忍びがたきをも忍ばないで何が出来るか。いよいよ怖ろしい處へは入る。

le20 *mardi* 朝起出でたる時は地獄にでも生れ出でたる気持だ。外へ出ると勇気をとりかへす。何あに、やれる處迄やるさ。*St. Paule* に *ange* がまっつらあ。午後 *St. Paule* につく。仕事を求めたがないといふ。もう仕方はない。餓死をまつ迄の事だ。此世の余計者だとあれば仕方もあるまい。*Alger* の親方に可く。まだ三フランある。生きてる間には雲でもながめろ。夕カンチンをたづねると *police* に会ふ。カンチンで喰はうとしてると、いっしょにあちらで喰へといひ呼びにくる。難有い事つた。皆人のいい連中だ。世の中もかうなると面白い。酒つきの夕食を喰って、毛布にくるまって眠れる。テイ車場の娘も別ピンだし、*café* にもいい娘がいたぜ。

le21 *mercredi police* の申入で *Ferme Chapreau* で働く事になる。

le22 *jeudi* 終日働く。決して面白い事じゃない。ここも長くはないな。女は器量のいいのもあるが、から田舎者の上上にせちがらくていけない。*pation* の出様によっては永くいてもいいが、どうも大した事はあるまい。いつ迄物置の中に眠る事か。

le23 *vendredi* 余りありがたい仕事じゃない。今日は *pation* の女中が一寸話しかけた。かうなると可愛ゆらしくなる。あいつは中々キツそうだが

器量は悪くない。

le24 *samedi* とに角 *misère* には相違ないが、割合安らかだ。少くも冬の間は辛棒するのだ。

le25 *dimanche* 半日働く。後の安息は *précieux* だ。

le28 *mercredi* 毎日同じ事だ。日記もしばらく休業だ。

#### *Fevrier*

le13 *vendredi* 少うしイヤになると熱が出るから不思議だ。11・12と二日就床。まだすっかりよくない。早く *patron* の *madame* がかへればよいな。方々へ手紙を可く。消息がないと淋しい。*patron* の *madame* は病気とかで *Alger* にいるとの事だ。これが田舎なんかきらいで、ロクでなしの物好と来ると面白い訳だが、果してどうか。もうこぼれ幸などはアテにしない。二年雪陰掃除をやつて一年絵を可々うといふのだ。これがやればおれも出世出来る。ここは嫌じゃない。*patron* の方で御免を蒙らない限りはやるぞ。よい加減に芽を出さないでどうなるか。長谷川先生はどうしたか。絵具を送るといって来たのは、くれてやるとの意味ではなかったの知ら。どこからも消息のないのは淋しいな。此間の *Bône* 行は失敗だった。何でも急いじゃいけない。二月の月はどうせ何にも出来はせぬ。あせるな。*Radda* が手紙をよこさぬ筈はない。一体どうしたといふのか。

le22 *Dimanche* 此暮を三年我慢すりゃたいいモノになるだらう。しかし一週間でも中々に永いぜ。*patron* のマダムは中々かへって来ないな。何とかして自分の室を持ちたいな。室とランプだ。ランプは遠からず得られよう。とに角恐ろしく気永に可々らなくては駄目だ。室をもちシラミを退治こつた。

le26 *jeudi* アラブのウソツキ何をいふか。アテになったものじゃない。シモナルといふのはパトロンじゃないらしいぜ。此頃少々疲れすぎる。休息を想ふ事甚しい。希望と悦がない。しかし我慢しろ。三年かせいで一年描くのだぜ。室をもつといふ事はとても不可能らしいぜ。何でもよい。牛の如くに生きるのだ。三年だぜ。

le28 *samedi* 自ら深く哀むぞ。此頃いつも悲しい。時には魂に安息を与へたからうじゃないか。

le29 *dimanche* 疲れたのか病気だかよく分らないがどうもいけない。午後床に就く。明日は休

養してやらう。無暗に思ひつめたとて、中々事が運ぶものじゃない。此處もいけない。又去りたくなる。しかし去るなら少しは準備が出来てからの事だ。見当なんかつけたとてとても駄目だ。たるまない範囲内に就て心の趣くままにやるさ。エンの下の土持ばかりやって疲れては何にもなるまい。

#### *Mars*

le29 毎日同じ事だ。悲しみもなければ嬉もない。それで沢山だ。三年我慢するぞ。兄と *Mlle Bernard* に手紙を出した。シラミさへ退治出来れば他に何の不足もない。ここは心地は悪くない。嬢がほしいな。*directeur* の女中のイタリア人が一寸気に入った。あれでもよい。しかしこれは急ぐな。時の至るをまつのだ。女中といふ奴は諏訪でコリゴリだ。まて何よりも先言葉を覚え、少しはタクワエをこしらへなくては駄目だ。急ぐな。

le6 *avril* 女中の奴何だか今朝はキゲンがわるかった。それですっかり悄気ちゃった。女はやさしくなくちゃいけない。*Bône* へ行く。面白くも何ともない。ボロさげてシラミと道づれでは、人中へ出られはせぬ。先づ衣装をこしらへなくてはとても駄目だ。かかあは無論必要だ。しかし先づ言葉だ。決して急ぐな。——当分急いだとてくる奴はあるまいが——三年といふ事を忘れるな。

le7 *avril* 嬢は芸術家でなくもよい。*Charlotte* で沢山だ。しかし衣装一着と *Atlantique* の岸迄の旅費の出来る迄は決して動くな。我慢が大事だぞ。

le8 どうも *Charlotte* が可愛ゆくていけない。

le18 *avril* 昨夜 *Mlle Radda* からの消息をうけとる。*Reudon* は *Aurique* へかへるとの事だ。さてどうなる事か。*Reudon* 先生。*Radda* の *marie* としては余り適当じゃない。しかし——おれも結婚しなくてはいけない。事によると *Charlotte* かも知れないぜ。どうも可愛ゆく想はれてならない——世界中で一番イヤな女中の *quarite* にも拘らず——先生しっかりたのむぞ。決して急ぐのではないぞ。なるべくなら *française* で美しくて金持がよからうではないか。

le22 *avril* これはいけない。向ふさへ承知すれば、おれの嬢は *Charlotte* だ。何故彼女を愛するか。彼女もおれと同じく、奴レイの暮をして悲しげに見ゆるからだ。よろしい。美しいフランス

人と婚するといふ望もなげうて。先づ暮さねばなるまい。そして絵だ。嬢なぞどうでもよい。

le25 *avril* 幸福だね。*fiancée* がいくらかもある。*Charlotte*. *Fifi*. *Radda*. *Mlle Bernard* 皆大分物になるまい。事によると *Charlotte* は少うし有望かも知れない。日よ早く過ぎよ。故郷へにげ込んで、ジャガ芋を植え、魚つりをやるぞ。

le28 *avril* 諏訪から荷物を送って来ない。*Mme Radda* は写真をやらうといひよこしたが、まだつかない。おれはしかし、さの幸福をも期待しない。実際かした剃刀が無事にかへってくれば幸福だといふ境涯で、何を期待し得ようぞ。よからう。生きていて、時には歌ひ得る。煙草が吸へる。夕には葡萄酒がのめるじゃないか。おれにとつては可なり大切なものだが、諏訪の荷物が失はれたとて決してなげくな。

le1 *mai* 絵の本も写真も *violon* もしばらく我慢しろ。先づ衣装と少うしのたくわえをこしらへてからの話だ。さすればもつと気楽にやれようぜ。うまく行けば芽が出る。行かなければ *Atlantique* の岸へ飛べようぜ。

le2 *dimanche* いかにも淋しいじゃないか。*Charlotte* が心に喰入っていけない。*française* じゃない上に別嬪でもなんでもない。オカメヒョットコにすぎない。何でもこんなのがおれの心を惹くのか。多分田舎っ平でいつも少うし世の中が面白くもないような風貌をしてる處が、おれの *sympathique* な心を動すのだらう。*Fifi* も悪くない。こいつはきつい奴な上に、おれのキラいな奴原に同感をもつ奴だ。*portion* の感りがよくない。しかし全く無交渉じゃない。好感でないにした處で、おれの存在が向ふに影況する時に甚しく立派な *expression* を見る。こいつも好きだ。*directeur* の女中に至っては、これはおれとは縁のない世界にすむ奴だ。どっかに少うしでも *sincérité* の影がなくて、は駄目だ。馬鹿ノ つまらない女なんか得る為だとすりゃ、*pompe* をおし糞掃除するのは余りの犠牲じゃないか。“道”の為だ。余り長くはあるまいが、晩年を全く自由と *contemplation* の裡に送り得るとすりゃ、これしきの事は何でもあるまい。まてまて其時は必くる。諏訪と本屋からも返事がない。*Mme Radda* と *Mlle Lucienne* とからも同じくだ。まち遠しいな。



le4 mardi 疑もなくロクな處じゃない。Espaqueを経て Atlantique の岸、悪かない。しかし衣装と旅費がなくてどうなるか。少くも千フランと衣装のととのう迄は出来ない。我慢をやっているのだ。諏訪のゴーツク爺一向荷物を送ってよこさぬ。M<sup>me</sup> Raddaは前ふればかりで次の便りがない。荷物をうけとりM<sup>me</sup> Raddaからの手紙をうけとり得れば一安心だが。とに角何にしても物事の運びが怖ろしくノロイ。Résignation。これに上こす力があるか。男だ。我慢しろ。

le7 vendredi mai 本屋から返事が来た。とに角 Renoir の本はかへるぞ。Manetと Courbetは切がととのってからだぞ。M<sup>me</sup> Raddaからは一向何とも言ってよこさぬ。巴里からすっかり縁切れになったとて大した事じゃない。只荷物丈はほしいな。何にも他に望はない。早く八フランただけのようにしたいものだ。こいつもむつかしいかもしれない。いつ迄も最初の通りかも知れない。男だ。急ぐな。何でも一切我慢しろ。

le8 samedi 悲しいな。馬鹿者共には一歩もヒケをとらうとは思はないが、偉い奴からは遥かに遠い。偉い奴に生れてりゃOdeonで猿芝居をやったり、Atelier Curdomonで素裸で立ったり、Arabeの雪陰掃除などやらされはしまい。よろしい。まで生きてさへいりゃいつかは国にかへり、ジャガ芋を植え、魚つりが出来ようぞ。それで沢山だ。金ためろ。Espaqueと Atlantiqueの岸だ。糞Charlotte。惚れた女に好意を見せる為に牛の糞掃除ノ 何といふ馬鹿野郎だ。Charlotteがおれに糞掃除を命じたのは、それにかこつけておれと話したかったからだ。死ねノ 恥を知るならば死ねノ 何處に好きな男に糞掃除をいひつける女がいるかノ 腹切が出来なきゃ永生しろ。そして糞をひっかけてやれ。汚い奴輩々。悲しいぞ。幸福な奴だ。Charlotteを見ると愛憐の心動くと嘆くには及ぶまい。幾年でもよい黙ってpompeをおせ。少くも男にはなれようぞ。

le10 mardi mai 昨日の夕からBôneへ行ってきた。いけない。女がいて心を擾乱する。ここへかへって非常におちつく。resignationと sacrificeだ。Rodinのいふ如くcontemplationと夢想を起す喜びがどこにあるか。天必ず生命をかすだろう。おれは此願望の為に一切をなげうつぞ。しかし嫌丈はどうしても必要だ。これもCharlotteで我慢する。Charlotteが拒めばFifi。これはもつと六

ケ敷からう。さすればどっかで乞食の娘でも探してくるぞ。何にしても幾分の資なくして何が出来ようぞ。violonを買ったら後はすっかりしまっておくのだ。Courbet・Manet・Matisseの本はしばらくまで。決して急ぐな。思ふ事正しければいつかは充されようぞ。長谷川から Renoirの本を送ってよこした。見事だ。金の溜る迄幾年でもpompeをおしCabineを掃除しろ。

le15 samedi 夜cantineでdanseを見る。心悅ばない。それはおれは孤りで、彼等は楽しげだからだ。もとよりla vie est dure pour louf le mondeだ。どんな輩にしろ彼等が楽しげなれば、祝福しなければなるまい。しかし彼等は哀れなるArabeをしいたげ、相生きてる事を知らない——。Arabeはしかし、しひたげられるに値するにも拘らず——要するにla vie est laibeだ。悲しいな。CharlotteもFifiも楽しげに馬鹿者共と踏った。おれの心にはmalicieuxな感情とjalouxの気持でいっぱいだ。馬鹿ノ 何にしても他が楽しければそれを祝福すればよい。

le17 lundi 又Baudelaireの“旅行者”になりさうだ。もとより馬鹿気切ってる。しかしこれよりよい地位をどこに求め得るのだ。拂本土にかへりたい。Arabeの邦も沢山だ。しかし何にしても旅費を調べ得る迄は我慢しろ。少くも諏訪の荷物の結着を知り、M<sup>me</sup> Raddaからの今一度の手紙をうけとる迄は、ふまれても蹴られても我慢するのだぞ。“Etre homme” 口丈ではいけない。出来ない我慢をしても男に丈はならうじゃないか。怖る處なくやってよい。生命はさうたやすく捨てるべきでない。しかし見る。囚人共は歌ってるじゃないか。いよいよよとなれば——prisonnierとしてでも生き得ようではないか。一体どうしたといふのだ。espritを失った此二三日は。我慢しろ。それは淋しいのはもとよりだ。しかし何時何處に淋しくなかつた偉いなる先進者が在ったか。おれはとて偉い奴じゃない。しかしさう容易におのれを破るな。少くも Philippevilleを経てAtlantiqueの岸に去り得る丈の資を得る迄は、あらゆる屈辱を我慢しろ。悲しいな。Rodin。誰よりも偉いなるRodinのいはゆる“Etre homme avans d'être artiste”これも至難の事だ。

le18 mardi おれをいつも喧嘩っぽい気持におくのは糞づまりの所為だ。何にしても戸のない雪陰では恐入るじゃないか。M<sup>me</sup> Raddaからの手

紙をうけとる。写真がは入ってる。もとよりおれの霊台のうちに創造するものよりは、はるかに貧しい。しかし非常の喜びに値する。M<sup>lle</sup> Bernardもよこすとの事だ。

le19 mercredi どうもいつも不愉快なのはcabinetが閉された故だと想ふ。何とか法方を講じよう。去るのもよい。しかし破るのはやめろ。大事を成せうとならば、二年や三年の病苦が忍べなくてどうするか。

le24 lundi mai 1920 M<sup>lle</sup> Bernardからの手紙をうける。おれは今 demi litreの葡萄酒であらゆるRemordsを消して。おれは涙をもってRaddaとM<sup>lle</sup> Bernardに感謝する。よろしい明日は又pompeをおせ。そして金ためろ。mouiseの戸をたたかうぞ。瞬間といへども幸福だぞ。

le27 jeudi 悲しいな。おれはとうてい偉い奴じゃない。よろしいbohémienでもよい。フランス中をへん歴しろ。そして国へかへって魚をつれ。OhノRadda Oh M<sup>lle</sup> Bernardノ 嬉しいぞ。おれは彼等のbon cœurをcanti de plierをもって感謝する。しかしおれとて—artiste peintreでありたい。若しCharlotteでもFifiでもおれと婚するといふならば、おれは他の一切をすてて全く精進の暮に入る。共にすすむ奴はどうしても必要だ。おれのcorpsの為に、おれのchemiseを洗ふ為に、破れた衣をつづる為に。RaddaとM<sup>lle</sup> RendonとM<sup>lle</sup> Bernardとは多分おれの一生涯の友たり得るだらう。おれは彼女等を受する。彼女等はartistesだからだ。vulgaireから離れて棲んでるからだ。しかしおれのfemmeはartisteでなくてもよい。paysanneで沢山だ。おれの破れたる衣をつづる為に。よろしい。手前の欲する如何なる道ならうとも歩め。Bohémienだともう事はない。しかし衣装と少くも千フランをため得る迄はここに止って毎日pompeをおせ。

le28 vendredi mai このmisèreの暮でも沢山だ。しかし今少うしよい暮——せめて日曜に休める暮——迄こぎつけようじゃないか。よろしい。violonをかふ事丈はゆるす。来月からは何にも買ふのじゃないぞ。

le31 lundi 宿無犬の如くに生きてもよい。我慢しろ。何をかいてもPhilippevilleを経てAtlantiqueのcôteに去り得る丈の金を得る迄は、面に唾せらるるとも我慢しろ。少くも諏訪においた荷

物の結着を知る迄は。Véritéノ おれは今véritéを求むる。悲しいぞ。おれはとうてい偉い奴じゃない。死ね。恥多い生が何になる。Monetの手を握って後、フランスの野の土となれ。

le1 juin CharlotteもFifiも恐らく物にはなるまい。よろしい。どんな事があらうと衣装一着とAtlantiqueの岸に去り得る丈資を得る迄は我慢しろ。Philippevilleを経てだ。OhノHelène 勿論Raddaの心もM<sup>lle</sup> Bernardのintelligenceもうれしいには相違ない。しかし尤もおれをうつものは、とても忘れがたいものは、可哀相なHelèneだ。おれはmiserableにうたれる。悲しい哉。Helèneは眞主持だ。Ne dites comme caといったPhilippevilleの買女も忘れがさい。おれの首に腕をまどひ、唇をもって来た奴を今たく想出される。よろしい。我慢しろ。衣装一着と旅費とだ。Colonieはいけない。拂本国にかへりMonetの手を握って後土にかへれ。とうてい手前は賢くもなければ偉い奴でもない。おれとても生命はおしい。しかし何の土産ももたないで、おめおめ祖国の土をふみ得るか。

le2 juin mercredi 又tempêteがおきさうだ。あぶないな。自由ノ とうてい空しい希だ。résignationに勝る力はないぞ。再び心に神をよびかへせ。M<sup>lle</sup> Bernardからの手紙をうけとる。よろしい乞食でもよい決して死ぬな。たとひ僅かといへども、世にはBon cœurをもった人間はいる。又orangeの実る故郷も決して失はれはしまい。去るもよい。無論の事だ。かかる處に永く止って何になるか。しかししばらく我慢しろ。pas de sonsで何が出来るか。

le4 vendredi どういふものだ。望が消えた。余りに慰めがなさすぎるからだ。又一切をすてて、二三日の自由の為にかけ出しさうだ。疲れたのだ。日曜の休日もない。これが一等悲しいのだ。よろしい。給金をすこうし上げろと談判しろ。駄目なら六月一ぱいかせいでPhilippevilleへ去れ。とに角諏訪の荷物の結着を知ろうではないか。Afrique迄落ちたのだ。全くArabe迄おちて見ろ。しかし此心はRodinの“homme”の心とは全く反対の方向だぞ。神をよばなくてはなるまい。感激と希望がなくてどうなるか。一切は失はれた。よろしい。馬鹿者共に屁をひっかけて去れ。一ヶ月の

辛棒だ。親もクソもあるか。所詮は死んだ後には一切は消えようではないか。生きてる間に悲しい消息をきかせようと、彼等が土にかへれば一切は消滅する。しかししかし悲しいぞ。彼等の生きてる間に何か哀れな彼等を悦ばすに足る消息を与えたいものだ。心破れる。おれは生損ひだ。

le6 dimanche juin どうしたといふのだ。此心の暗さは。去ろうとも呼び得ない。極度に淋しいのだ。生命もいらぬといふ狂暴の心はまだよい。此態は死の如く怖ろしい。おのれの心を外にして、何所におれの安住の地が在るか。Oh 其心が消えてる。他によりたいのだ。Cafe で酒をのんでもおれは孤りだ。此貧しいColonieの住民。乞食の如きarabe。嫌悪の心でいっばいだ。淋しいんだ。愛し又愛されたいのだ。Philippeville! おれの首に腕を可らんだ奴! 悲しいな。おれはとうてい偉い奴じゃない。

le8 juin 御前のâmeがもって真を認る處に止れ。今の心。これが本当じゃないか。止れ。résignation。耐忍べ。

le11 vendredi 至る處に自然は在る。怖るるには及ぶまい。固着するには及ばない。正しと信ずる處を行ひ、fatalitéの命ずる處に従へ。去る。止る。どちらでもよい。

le17 jeudi 八フランよこせばとに角、さもなければ去るのだ。秋風に吹かれながら西南部フランスをさまよひ、Atlantiqueの岸へ出ようぞ。Colonieはいけない。Arabeも沢山だ。

le18 mercredi とうてい駄目だ。一切の失い、皆おれに在る。他よりも少なくうけて、他よりも多く拂ふ。よろしい破れ。とうてい業を成就し得るの見込はない。Atelier Cormonで素裸で立ち、Odeonでは猿の如くにおどり、ここでは手でもってcabineをさらへた。破れ破れ。何で屈辱の生をおしむのだ。拂本土へかへれ。そして西南部フランスをAtlantiqueの岸迄出ろ。とうてい真のartisteでもなければ、Rodinの“homme”でもない。Bohemienだ。よろしい。何なりとやれ。心破れるぞ。FifineでもCharlotteでもよい。しかし縁はなからう。これでなければといふ奴——Heleneの如き——にぶつかる處迄行け。人間らしい奴に会ふ處迄行け。疑もなく世の最も弱者の心だ。しかし生れつきとあれば仕方もあるまい。bonhomieとnobleな心をvulgaireの徒のホン弄に任すはいかにも残念だ。去ると決まると一日といへども永い。

しかし八月迄は我慢しなきゃなるまい。行け行け。四度HeleneのMarseilleをよぎって後、Pyreneesのふもとに去れ。おのれの心を外にして何がある。しかし決しておれは偉い奴じゃない。何かsoutienに値するよいものを見たいぞ。

le21 lundi juin 諏訪の爺から荷物は無いと言つてよこした。日記を失つたのは悲しい。しかしun pauvre gosseのhistoireが何に値するか。よいよい。academieのcroquisの失はれたのも悲しい。しかし生命さへあれば又かけよう。よいよい。ここはvulgaireとvoleurの邦だ——当分世界中至る處さうだらうが——去ろう。約束の地を見出づる迄は漂泊しよう。un vagabondは可なりに悲しいが、それがおれのfatalitéとあれば仕方もあるまい。

le23 mercredi juin おれは今酔つてる。しかしいかなるmotifからにしるrecordsから超ダツして、一切に対し温情をもちうれば、此心境は正しからうではないか。生きようぜ。何はなくとも“Nature”とfrançaise丈はあらうではないか。

le15 juillet 1920 九月半ば迄またうと思つてたが、これじゃとうてい駄目だ。去ろうときめるとこの暮はいかにも馬鹿気てる。一時も早く去りたい。今日は腹工合をこわしたので休む。病気でなければ休めないなどといふ馬鹿な事があるか。一皮ぬげ。乞食でも何でもやれ。

le30 juillet 20 此頃Charlotteが可愛ゆくて耐らなかつたが、今日やうやく少し楽になった。おれは女の前へ行くと、目が眩んで何にも分らなくなる。ロシヤッポーはCharlotteは足がわるく、mal des yeuxだといひやがった。ピッコ位何でもないが、目の悪いのはいやだ。よく見なほすんだぜ。こいつがおれのかかあにでもなるといふなら、おれはここにしばらく止る。しかしとうてい駄目だろう。Monetの手を握る得るか。Bayonne迄こぎつけ得るか。Montpelleirで止るか。Marseilleで波止場人足か。ここの處、とうてい分らない。

le31 juillet つまらぬものに惚れたものだ。Charlotteを——見なければさうでもないが——見るとどうにも可愛ゆくてならない。困った奴だ。どうも此節はいけない。心に悦がない。

le17 mardi (Août) 此間Bôneで買女を見てか

らCharlotte熱は退治た。イタリ一人なんかイヤな事つた。長屋の娘なんか止せ止せ。大声でガミガミ言つて馬鹿に威張つてる。ここの女なんかイヤなこつた。無邪気なたのしげなRenéeの方よっぽどよい。とてもMonetのAtelierをたずねるにたる文の金はたまりっこない。Marseilleで人足をやり、引張りか貧乏人のうちにかかあを見つけろ。

le24 mardi Août 一体どうしたといふのか。何にも感じなくなった。面白くも何ともない。去る時が来たのだらう。Cantineが矢張帳ツケをやるといふので、気分をとりかへした。よろしい。又Hasegawaへころげこんで、Midiの秋色を可くといふのを的に、今四五十日我慢しろ。

le4 Août (Sept) 1920 気力をとりかへさうじゃないか。Rodinのいはゆる“homme”にならうじゃないか。つまらない見得はふりすてて、思切つてMarseilleで人足として働かうじゃないか。少うしでも自分の持つて生れたものを尊重する限りは、破るのは止さうじゃないか。土を喰へと吐しやがった奴の事を忘れるな。たほれてなるか。

le17 vendredi Sept 1920 とうてい駄目だ。思ふ事何一つとしてはこびはせぬ。失は一切おれに在る。とうてい勇猛の精進者じゃない。此頃絶えず疲労を感じる。風邪気のぬけない故だらう。全くだ。Rodinのいふ如く“d'espérer”だ。希望があると一切を忍び得る。希望がなくてはとうてい駄目だ。とに角金を持残さなくては駄目だ。しかしとうてい駄目だ。夜身体中がかゆくてよく眠りがたい。とに角衣服は清浄でなくてはいけない。身体を不ケツにしておいては、精神も又鬱にかたむく。しかし自噴と同時に自ら深くあわれむ。七フランのjournéeでcantineでとても拙いものを喰ひ、倉に眠り、シラミにせめられながらではどうにも六ヶ敷しい。Marseille迄こぎつけるつもりだ。又Bôneで少しく絵をかきたいつもりだ。これすらが果してみたされるか。此乞食とシラミと泥棒の邦から逃げ出し得るか。Helas! ほんにわずかの事すらがとてもはこばない! Hasegawaが便りをよこせばころがり込む。さもなきあMarseille迄こぎつける。当分Marseilleには止り得まい。Helas。実際むつかしい。昇天する事だ。しかし手前には天国は在るまい。冷い土の下に永遠に眠る事つた。しかし寒くてもよい。France迄

は逃げかへれ。眠るならばFranceの土の下だ。Afriqueはいけない。フランス人のクツとシラミだらけのArabeの邦はとても耐らない。酔拂ひ、melonをノド迄喰つて、それが生きてるショークだあつては憤激するぞ。よしんば美衣美食をやるにしてからgaise moraleがなくてはイヤだ。たるみやがった。又餓えろ!

le18 samedi Sept 1920 なるべくはMarseilleでふみ止りたいと思ふが、Marseilleへつくと文無しといふに決つてる。とうてい駄目だ。HasegawaもMlle BernardもMme Raddaも一向返事をよこさぬ。一切から離れた方、反つていいかも知れまい。今度こそはviolonをたたきこわさず、こいつを友としてEspagne迄こぎつけろ。来月十日迄我慢しろ。そしてHasegawaの返事が来なきや、本と絵は弟へおくりつけ、violon丈ひつさげて飛出せ。決して死ぬな。

le26 dimanche Sept 1920 夕方野へ出てスケッチする。いけない。どうもいいトンが出ない。何にしろうてい駄目だ。薄馬鹿共も見飽きた。去れ去れ。Esclavageも沢山だ。思ひ切つて乞食になれ。何と此汚じみたシャツの気持のわるい事は。かなり働いてやって洗濯したシャツもつけられぬといふ法があるか。孤りはイヤだ。喰はないで生きていられる女の見つかる迄、そこいら中を歩け。おれはたしかに少うしどうかしてる。しかし世には、余りにどうもしていない豚の如くにニブイ人間にあり余る気狂女の見つかる處迄行け。今度こそはviolonはたたきこわすのじゃないぜ。Raddaとて出鱈目だ——女はどうせ出鱈目に決つてる——しかしあれ丈は今にいい感情をもって想出せる——おお、Parisへ一度かへりたいな。LouvreとLuxembourgを一寸見て、Espagneさして出立したいな。おお、Marseille迄が精々だらうぜ。一皮脱がうじゃないか。少うし方角をかへやうじゃないか。ほんとうの強さ。これでやり通さうと思つたがとうてい駄目だ。鬼勝でやってやれ。猫の如くに弱いのはイヤだ。おのれにかつ。これが出来ないで、他に対してのみ忍従したとて何になる。これこそ真の弱者だ。偽でもよい。喧嘩でも何でもこいといふヤケムチャで行こうじゃないか。馬鹿者の中を離れて暮す事が出来なきや仕方がない。あらさうのだ。今度こそはローヤへは入れ。餓えたとて決して他の憐など乞ふな。死か乞食か口一屋かの一をえらべ。此處での手も足も出

ない醜い暮はどうだい。

le27 lundi Sept (20) 去るのも遠かない。しかし悲しいな。又 *Charlotte* が可愛ゆくてならぬ。此地の最大の記念は *Charlotte* だらう。これはイタリー人だ。カチヤの娘だ。貧乏人の子だ。其弟をひっぱたく處を見た。ホーキが *cantine* でいくらするか知ってるかといった奴だ。拘った處の在る女だ。しかしおれに三個の *orange* をくれた奴だ。 *cave* 迄ついて来て、日本語で戸は何といふかなどといった奴だ。おれの側へ来る事をいやがらなかった奴だ——あの *Marie* の奴はおれを *Arabe* 並にあつかった間に——人間に語るが如くやさしい言葉を口にしながら、草花に水をくれてやった奴だ。炭をより分けてると、此奴も共に手伝った事を記憶する。おれは女美術家もモデルも好きだ。しかしこれ等と一生共に棲もうとは考へない。疑もなくおれは一放蕩児だ。しかし常に *vérité* を求むる心は在る。此節ケン家の *Charlotte* と共に怖らく *frugale* な暮をやって見たいぞ。 *l'art* の為。真の生の為。おお！ 皆空しい希だ！

le28 mardi Sept 1920 馬鹿野郎。何で明日の事を思わぶらうのだ。今日一日マカロニでもかもう事はない。喰って飲んで煙草を吸ふ。勝手な事を考へながら生きていられりやそれで沢山じゃないか。

le29 Sept 後数日で出立といふのにガマンしきれず、旅とあればいくらでも金は要るのに、すっかり *cantine* へ奉納して了ふ。どうにも賢かない。つまりは *espérance* がないからだ。“男”でないからだ。悲しいぞ。 *Merde!* *Charlotte* は、おかめひょっとこ見たいな面してやがる。それでも可愛ゆいとは因果な奴だ。可愛ゆいがいいや。向ふでは豚位にしか考へてやしまいぜ。

le30 Sept 1920 *Vaudauge* も了った。近々にカン定だらう。よろしい。何にも要る事じゃない。去らう。今夜は糞をとってない。羊の腸をよこしやがった。いくら何でもくさくて喰へはせぬ。 *misère* ももう沢山だ。よろしい。鬼勝だ。何でもやるぞ。今日 *Loui* と共に口馬に乗った。口馬が馳けた調子に二人共落っこちた。 *Loui* は顔を少うすりむいた。可哀相に。おれは腰等を打った。 *Loui* は可愛ゆらしいな。おれは想った。世には面白い事はいくらもある。しかしおれには何にも許されない。死んだ方むしろました。 *Merde!* 何でもやるぞ。 *Pauvre gosse*。いくら腹立っても *ar-*

*abe* なんかひっぱたくな。 *direction* に一寸皮肉くって後、去る事ったぜ。

le6 Octobre 此 *journée* が八フランといふ事になったので、 *Paris* へかへりたいといふ気になった。もう *M<sup>me</sup> Reudôn* とは絶縁のつもりで六茶な事をかいてやったら、かへって当たると見え可愛ゆらしい手紙をよこした。今一度の手紙のくる迄働かうといふのだ。しかしとても *Paris* 迄の金はたまりっこない。想ふと氣力もぬけて了ふ。シラミの卵がかへったと見え、又おびたしいシラミだ。シラミを見ると色も恋も何もない。何でもよい。先づシラミを退治ろ。いくらゆで殺しても又わきやがる。シラミといふ奴は *vulgaires* と同様とうてい我慢がならぬ。

le7 Octobre 1920 とうてい *Paris* へはまだかへれまい。よろしい。仕事をやめて、全く自由に二三日写生するといふ楽丈で沢山じゃないか。冬は *Marseille* か、さもなれば西南部のフランス海岸で越せ。今 *Paris* へかへって *Radda* を見れば、少くも *ambrosien* しないではおかれまい。それでは *Reudôn* 先生が可哀相だ。 *Midi* で *ange* をさがせ。最早決して金持のフトコロなどねらうな。他の助も求むるな。腕いっぱいんで乞食したとてやり上げる。

le11 Octobre 1920 昨日の *fête* はとうと病気ですっかり寝込んで了った。今日も休む。どうも熱がぬけないのだ。明日もいけなきや、もう切上げる。所詮は *Paris* 迄の金は出来はしない。決して破るな。何があらうと決して死ぬな。石に喰ひついても決して死ぬな。 *Marseille* も耐るまい。しかし *Marseille* でふみ止って旗挙しろ。

le13 Octobre 昨日はボンで大分苦しんだ。夜も熱が出やがった。おれは最後の事ばかり考へた。 *Marseille* の病院で死ぬれば此上の事はない。死を見る。帰するが如しだ。おれ見たいな奴が何で此世に有用なものか。今夜は少うしよさそうだ。とに角 *Marseille* 迄は楽にやらしてくれ。向ふでぶったほれる分には少しもかまわぬ。むしろ本懐だ。手前はとうてい無茶者だ。よい住生はない。死にぬいてる。しかし寝台の上で死なしてくれ。寒くなくね。これ丈はたのむぞ。

le14 Octo 20 どうも熱がとれない。二三日の休息、それのみが楽みだったにからだ。しかしこれでいいのかも知れまい。さもなければ *Alger-*

*ie* からまだ足はぬけないかも知れない。 *Dieu* がフランス迄おれを送りかへすのだらう。これで健康であれば、例の無茶な魂があげられ出して、懐中はすっかりなくなってふに決ってる。 *Dieu* が酒をもうばった。酒をのむとぶったほれさうになる。おお、心は海の底の如くによどんでる。

le15 St. Paul 出発。

le16 Bône. 写生に出かける。夕 *Bône* 出帆。

le18 朝 *Marseille* 着。夜は *Palais Christal*。とても *Dieu* ねれを導き絵はず *pauvre gosse*。 *l'enfant prodigue*。死ぬ。南フランスの土となれ。 *Mélie* の手を握る。可愛ゆらしいな。例の *desse* に会ふ。おれの大切な煙草をとって行っちゃた。さて先生、生か死か。どちらでもよからう。

le19 朝長谷川を訪ねる。主人は不在だ。とても一寸出て来た連中を見ても、ここで働く気にはなれない。又 *les œuvres* は見ても反吐が出る。何でもよい。西の方角さして歩けといふので出かける。田舎へ出て初めて心がおちつく。しかし同時に悲しくなる。今度こそは一度ぬぐか。それともぬぎ切れないで首でもひきぬぐかだ。絵具箱が荷になる。捨てようと思ふが、景色を見るところつづかしい。明日はどうなるか分らない迄も、どうもおしい。海へ出る迄我慢しろ。ここいらへすてて、賤民の手に汚されるのは残念だ。草上に暇寝する。さめると悲しさでいっぱいだ。

le20 Martignes

le21 Fos St. Louis

le22 終日ローンにそひて上る。 *pénible*

le23 Arles. *violon* をうる。

le24 St. Gilles. *Vanvert*。生命は大切だ。故郷へ逃込まう。それにしてからが、旅費をうる為には今二年の辛棒だ。死ぬな。夕 *Lunel* 着。 *café* には入る。悲しくてならない。氣力もつきた氣持だ。名譽も恥辱も考へない。故郷へかへりたい。おお——。 *Montpellier* 迄尚24キロメートル。明日は惨痛だぞ。煙草もつきた。明日のパン代丈は残ってる。心も破れるばかり悲しいな。 *Lunel* の街はづれを歩いてると話しかける男がある。話すとパン代をよこし、其家にもないパンとフロマージュとショコラーをよこした。

le25 lundi 野にふしおきて、隣村の *café* に至る。主婦がブドー酒はうらないといふのによこして、煙草を二本くれた。天にも昇る心持だ。哀れな自由も、 *Artiste* の心も、パンも、煙草も今日

でおしまいだ。せいぜい味へ。 *Montpellier* について何が在るか。野は、心を休める街は、おれを搦す。ブドーの紅葉の美しさ。並樹のプラタヌの心地よさはどうだ。これが懐ゆたかに、描きながらの旅だったなら、どんなに楽しからうに。労働者などはイヤだ。憩ひたくていっぱいだ。も少うし行った所で、陽光をあびてゆっくり眠れ。おおいかに今故郷を想ふか。疲れ切ってる。希も何にもない。さめると熱を覚える。夜雨ふる。歩む氣力もない。路旁に眠る。

le26 mardi 朝 *Montpellier* に入る。午後 *Musée* を見る。既に氣死してる。只々疲労を感じる。熱いスープを吸って、あったかい寝床の上にごっすり眠りたい。今日はいくらも喰ひはせんぞ。 *commissaire* の御厄介にナル。

le27 牢屋へもは入りそこなつた。まあいいや。今夜はとに角床の上で眠れる。

le28 朝 *commissaire* へ行つて *papier* を貰ひ、 *hôpital* を訪ふ。ここで二三日御厄介になり、体力を腹して後 *Bayonne* 迄こぎつければ御あつらへ向きだが、市役所のあの人のいい爺さんもフランス人だ。今日言った事はすぐ忘れたふだらう。何でもよいヤハリ生きていたい。自然に眺入る悦の為に、勝手に考ふる悦の為に、我慢して故郷の海の畔にかへれ。静かでいいな。しかしゼイタクを言ふぜ。他の連中と同居はイヤだとさ。先生御手前は文無しだぜ。

## Novembre

le3 熱が去って喰ふものに味が出てくりや、又氣力も出るだらう。大した事じゃないと思つたが、毎午後四十一度に昇つたのには閉口した。午後のフルエは可なりに耐らない。今日はどうかな。まだやって来ないが、さっき薬と湯をいやといふ程のまされて反吐をつかさされた。いつも飲物の事を考へてたが、今は思つてもムカツク。さて *Paris* からの返事はいづれにしてからが来さうなものだ。しかしどうでもよい。健康さへ恢復すれば、なかに又腕一本でやるさ。世に多きを求むるな。夕青山から消息がある。十フラン封入してる。これでも結構勇氣がつくぞ。夕方よこした菓子ほうまかつた。

le4 Nov 手紙をかく。これで非常に疲れたらしい。矢張フルエは止らない。

le 6 (samedi) Novembre 今日はRaddaがおれの手紙をうけとるかな。mon frèreもいいが、何とか一つ煙草をたのみみたいな。返事は四五日中に来るとして、まだ退院といふ事はあるまい。昨日は三十九度だ。まだロクに喰へはせぬ。ゆっくりかまえて休養する事だ。ここですっかりAfriqueの熱とシラミと思っても胸クソ悪い印象とをふりすてて出発したい。児島氏は馬鹿におちついでるな。少しは何とかなるか。それとも黙殺かな。先生も中々シッカリしてるから。

le 7 dimanche 今朝は熱はないさうだ。煙草がのみたいな。起きて日南へ出て見たが、衰弱感と眩マイとで気持ちがよくない。午後フルエも寒気も来ない。もう大方夕方だから多分これでいいのだから。うれしいな。

le 8 lundi Novembre 日は庭のプラタヌに照る。熱の引くにつれ気力は出てくる。楽しいな。これで児島氏がフン発してくれりゃ天国だが、どうもこれは怪しさうだ。多きを望むな。退院すりゃ新しい気力でCourbetとDelacroixが見られようじゃないか。すっかり病気を退治後は又出直せ。同じ道だ。ふみはづしては又よち上るのだ。これがおれの一生涯のツトメだ。Raddaはもう手紙を読んだらう。cadeauを忘れてくれちゃいけない。ma sœur。今度こそは心を鬼にして極度につましく、法悦の外は考ふるな。破れたるをととのふる悦、これも大切な事だ。青山がいつか話したスペイン国境の美術家村といふらしいのが分った。其所から来たといふ男が今日それを話した。よろしい一先づそこを見てやれ。Bayonneはどうせ時機が後れてるのだ。急くには及ぶまい。熱はどうやら治ったらしいが、まだまだヒヨロヒヨロして歩けはしない。今頃ほうり出されちゃたまらないぞ。手紙の返事のある迄はおいて貰ひたい。やっと起きたてばかりだぜ。

le 9 mardi 寝汗も止った。さあこれからは体力の復活だ。今朝のpainの小さかった事は、しかし向ふで用心してくれるからは、それはまだ急には追出さない証コだ。とに角充分元気の出る迄はカンベンしてほしいぞ。青山可ら消息ある。長谷川はボルドーの海岸に行ってるらしい。長谷川と青山にかく。青山は又少し金をよこした。いい事だ。今日は実にいい天気だ。午後のcaféにトナリの先生のくれた煙草のうまかった事は。

le 10 mercredi 今日もいい天気だ。今日は

M<sup>me</sup> Radda 可らの消息でもうけたいな。cadeauは駄目にしてからが手紙でもほしいぞ。スペイン国境のartiste連のいる村にしてからがロクな事はあるまい。しかしまさかに St. Paul の生活よりはよからう。よしんば人々は如何に在らうと、景色はいいに決ってる。一先づCeretをさして行かう。とうとう今日はRadda可らの手紙は来ない。cadeauで手古づってるのかも知れまい。少しし腹工合をいためて不愉快だったが、どうやらおさまったらしい。病院もいいが、健康と自由とはもっとよい。又起上って何でもやるのだぞ。さきやかな室——シュミ子のある——にすみ、日曜の休日を持ち、余りひどくなく暮せる處迄こぎつけろ。夜M<sup>me</sup> Raddaに可く。

le 11 jeudi 十五日過迄は出ないぞときめてたが、丁度いい工具に少しし腹工合がわるく余り喰へない。ぐんぐん喰へる迄はゆっくりかまへて十分に休養する事だ。明日は煙草を可へるぞ。何にもしないで勝手に考へ、寝台の上で煙草を吹かし、caféをとり、牛乳のみ、餓ぢなく、暖かに眠れる。又中々えらいのだぞ。急ぐ事はないぞ。煙草丈はい。これは気力を与へるから。しかし酒と女は少ししよく行く迄は我慢せうじゃないか。此病院生活をクギリとして、一歩前へ進もうじゃないか。Dieu。病を与へて、タイ魔のespritを一掃しといて、Hôpitalに休養させると見てよからう。又起上って祈念と精進の暮に入らうではないか。Charlotteに可く。

le 12 vendredi 昨日腹工合がわるかったので、ピュールジュをくれろといったら、明朝やるといふ。昨夜ウンと暖めて眠ると、今朝は固ってる。そこへ朝食を与へないで塩っぱいピュールジュをのました。何でもいい、出した手紙の返事のくる迄はひっぱれ。我慢しろ。晝飯はうまかろうぜ。人並に喰へる。しかしどうにも足が重い。何にしる体力の充分復する迄はおいて貰ひたい。出てすぐ困るのはたまらないので、折返し長谷川に借金のをかき送る。児島氏がmandatをよこした。これでよろしい。これで苦しCeretを見て、そこもいけなきやBayonne迄こぎつけられる。しかしそれにしても歩行がもっと自由になる迄、ここへおいていただきたいな。

le 13 samedi 無一文ならとに角、金がは入るとなると熱が去ってよりもう六日にもなる。足が運ばないと言ったって他は知るまい。少しし居辛

いな。しかし向ふからもう出てよからうといふ迄——でなくとも、もう少し活パツに歩ける迄——は凶々しくかまえていようではないか。出ると懐がぐんぐん減つて行くに決ってるから。月曜日迄はおいてほしいな。出るとすぐMuséeへ飛込むぞ。いい工合に又腹工合がわるくなる。晝はcaféとpainだ。隣の奴の喰ふたつき肉がうまさうだが、我慢して夕もcaféとpainで腸を固めてやらうではないか。火曜日に出るというハコビにしたいな。懐は出来た。しかし慰めも重要だ。Raddaの手紙がほしいな。とに角消息がほしい。絵の本かい小説がほしい。此消化不良は、こもも沢山だからだろう。出て二三日自由に暮せばなほるだらう。もう頭はいいんだ。病んでばかり見ては耐るまい。明日一日我慢して月曜には出よう。

le 14 dimanche 退院の事をsœurに話すと、無用の費ははぶけ、三四日いてよろしいといふ。児島氏にかく。少しし精神を使つたと見え、午後又発熱する。熱はいいが、バチルスが相不変体内に在るのはイヤだ。悪寒が去ると楽だ。生か死かどちらでもよからう。まさかして死にもしまいと思ふが、もう何よりも健康がほしいぞ。一体何度だったのだ。向ふの言ったのがよく分らなかった。今度はもう御手和に願ひたい。

le 15 lundi 文無しならとに角、大金持じゃないか。もう少し積極的に行かうではないか。せめてはここでうまいたつき肉の御代りをいただいて後、出ようではないか。Marseilleの宿屋へおいて来たcarrageを送ってくれとかく。多分一フラン捨損だらう。煙草を吸って生きてさへいられりゃよい。又かせいで、若造の(男)の着てるような衣装一着——新しい奴をね——と、日曜用の靴とをかはうじゃないか。Ceretは山地かも知れない。しかしPyrenees OrientalesのEspagne国境に近い静かな處なら陰棲には尤もよからうじゃないか。描く處又描きたい人間はいくらでもあらうじゃないか。Bayonneも悪かなささうだが、AtlantiqueよりはMéditerranéeの方懐かしからうじゃないか。今日の午後はうまく喰った。おかしな奴だ。昨日から相当に喰ったのに、今朝はcabineへ行かないぜ。今日は熱はどうかな。もう沢山だぞ。何か本を読みたいな。退屈で仕方がない。いけない。やはり慄える。九度八分とか言つたぜ。又初まりて言ひやがった。どうも手当のゆっくりしてるには驚く。おれには薬なんかよこしはせぬ。

時々の注射と馬鹿に血をとりやがるきりだ。大方四十度でいて、慄えさへきり、悪寒さへなくば平気なものだ。かくして寝台の上に起上ってかける。食慾もある。煙草ものみたい。どうもおれの身体も頭も少しし変に出来てるらしい。困った無茶者だ。熱に馴れたといふのかい。冗談じゃない。身体丈が資本のmalheureuxだぜ。決して金持じゃない。まあ楽感するさ。今迄かなり永い間苦しんだから、ここでかなり永くおいて休息させると見りゃよからうじゃないか。そして後、新しい道が開けるのだ。

le 16 mardi 又血をうんととりやがった。そして注射は明日かい。もう沢山だ。食慾はあるんだから。しかし注射すると又胃をいためるのじゃないか。今日は多分昨日よりはいけないぜ。朝いけなかった上に貧血のおれをいぢめやがったから、果して又40に上った。しかも苦しくも何ともない。喰ひたくて仕方がない。焦るな。難有いじゃないか。室はしょつ中暖められてる。食事はうまくとれるじゃないか。夕食時にも肉をしゃぶってやった。煙草もうまかった。気力が大事だ。物的條件も大切だが、気力にともなわれなくては(大)した効果はあるまい。血をとるのは血精でもこしらへる為だらう。明日は注射するだらう。金曜日迄にはどうしても熱い退治するぞ。煙草を買ひはずしてはなるまい。

le 17 mercredi 昨夜はよく眠れなかった。今朝やつと注射した。よろしい。明朝迄に退治るぞ。MuséeとMarseilleの宿は一フランダグのとりどくか。長谷川は事によると黙殺だぜ。Radda先生は一たいどうしたといふのだ。今日は少ししよろしくない。今日を頂上にしたものだ。どういふものか今度はしょつ中まどろむ。夕食後すぐ深い眠りにおちる。

le 18 jeudi 矢張ダルク眠い。明日の煙草はかひはずすかな。午前にフルエは過ぎちゃった。晝cabineへ行かうとして、とうとう洗面所で卒倒する。しかし便は心地よく行った。ぶったほれたので急に注射に来やがった。何とかして明朝迄に退治したいな。腹工合の調セツ法は呑込んだ。今度はうまく行かうぜ。熱は下つたに可々変わらず、眩マイの気持でいけない。当分薬の所為だらう。

le 19 vendredi 昨夜はどつきり汗が出やがった。これで御しひに願ひたいな。熱は段々に下るらしい。しかし薬の所為だらう。ノボせていけな

い。長谷川がmandatをよこした。長谷川らしい文句がついてた。

le20 多分今日はフルエは出まい。又消化不良だ。おれはキニー子がキライだ。眩マイの気持は非常に不快だ。Bayerへ荷物をよこせと可く。果してフルエは来ない。熱は殆ど去った。

le21 dimanche 宿の神さんが包を持って来た。

le22 lundi M<sup>lle</sup> Bernardに可く。何故M<sup>me</sup> Reudinが手紙をよこさぬかと聞く。消化不良はいけないな。児島氏が見舞状をくれる。

le23 mardi 児島氏に可く。今日は陰天で寒くていけない。寝汗もだんだん少くなる。腹工合も大分うまく行くらしいぞ。うれしいな。シラミも退治されるぞ。熱いcaféと新しいパンにフロマージュをとり、新しいシャツをつけてCourbetを訪はふぞ。

le24 mercredi 昨夜は喰ったぞ。此分なら腹工合は大丈夫らしいぞ。月曜日には出たいな。Marseilleの宿の奴は果して一フランとり込みやがった。Marseilleは禁物だ。

le25 jeudi 食物に本当の味が出て来たぞ。此度は大丈夫だ。又出で、惨痛の道を進むぞ。M<sup>me</sup> RaddaとM<sup>lle</sup> Bernardの手紙がほしいな。M<sup>me</sup>がおれの手紙により、感情を害せられる筈はない。御眞主がかへっていて、文着でも起さないかぎりは書いてよこす筈だが。それともParisにいないのか。女なんてどうせ気マグレだ。余り真面目に考へ過ぎては損が行くかも知れんぞ。M<sup>lle</sup> Bernardは余り若かすぎるし、何と言っても人世は彼女には楽しい。おれの事など考へる暇は余りあるまい。今日は御天気らしいぞ。オヤツのcaféに煙草のうまかった事は。月曜日に出るとして、後三日は天国だぞ。しっかり憩め。

le26 vendredi 陰天は心を暗くする。月曜日に出るとして、出てからの又惨痛の生は想ふだに怖ろしい。洗はれたる寝衣、人並の食事、清潔な寝台、此自由をうばわれたる病院すら去りがたいぞ。健康の復するにつれ感官が覚めてくる。Renoirの写真は甚しく心を悦ばす。おお、弱しとて嘲られてもよい。おれは助を求むるぞ。Cerretに幸運がおれをまつて事を呉々も祈られるぞ。描きたい。人並に暮したい。静かに考へたいぞ。想煩ふな。出ればCourbetが見られるじゃないか。哀しい心をいだいて汽車の旅が出来るじゃないか。それはbohèmeの心、vagabondの生だと罵られると

も、今日を外にして明日に何を期待し得るか。健康を復すると同時に、哀しさもよみがへって心を占むる。まてまて、勇猛の心も又やがて帰来だらう。

le28 samedi 月曜日と想ったが、明日が都合よいといふ。明日は港を出るぞ。他より嘲られようと、かもう事か。bohèmeの心と呼びさませ。それでなくてどうして哀しい心を支え得ようぞ。今日の食事はよく味って頂戴するのだぞ。

le28 hôpital を去る。出ても心が騒ぐばかりだ。はげしくvéritéを求める。静かな生活が想はれる。想ふと病院はわるくなかった。此宿はどうだい。

le29 novembre いけない。今日の心のいそがしかったことは。去れ去れ。悲しい気持だ。心に望まなければ悦びもない。Cerretは寒いさうだぞ。怖ろしいな。

le30 午前Muséeを見る。半日じゃ余りいそがしい。絵具屋がある。箱がある。ほしいがどうとも仕方がない。おお、所詮おれはおれだ。思ふ處は賢いが、為す處はそれより程遠い。嘆かれるぞ。絵もいいが、心に安静なくては駄目だ。おお、それにしても明日はどうなる。Pyreneesの山ロクにangeの代りに雪がおれを待っていたらどうなる。不安と悲しさでいっぱいだ。何がある。又労働者の仲間だ。忍べ。とに角先づ絵具箱をとりかへすといふ悦の為に一切を忍べ。

le1 novembre (Decembre) Montpellierを去る。Cerretにつく。果して雪をいまく山がおれを迎へ、Monsieur le peintreはスチン先生だった。去らう。

le2 novem (Decembre) どうもCerret行は気が進まなかった。いよいよBayonne行だ。何はあらうと、今日一日の旅は楽しからうじゃないか。Narbonneから陰天だ。其上に齒がいたみ出す。心甚しくくらくらする。何故病院で卒倒した時、そのまま永く眠つてはなかつたかと思ふ。余り幾度も同じmisereをくりかへすのは耐えがたい。夕Toulouseにつく。Bayonneへの発車は十二時過だ。齒痛は少しづつしづまる。

le3 どうせ事のうまきはこぶ奴じゃない。怖る事なかれ。すでに恥多く生きすぎたらあ。ぶつたほれる。(汽車にて) 朝Bayonneにつく。宿

をとり、午飯を喰ふ。懐はいくらもない。あらゆるものがおれを壓迫する。疲労感のみだ。戦はうといふ気力は少しもない。どうもよく歩めない。精神が起きない故か、それとも病気の所為かよく分らない。只ものうい。事によるとシラミは退治られていないぞ。路旁にゆきたほれるといふ事より他に、おれのうくべき宿はない。とすりゃ、甘んじてうけようじゃないか。Mr. Berseinをたづねる。案の如くもうplaceはないといふ。ないといはれて反って安心して居る。

le4 荒天だが仕方がない。何處に雨をしのぐべき處が在る。Biarizへ出かける。海岸へ岩穴をさがしに出たが、破れかけた空家を見つけ、そこに眠る。

le5 終日眠る。

le6 policeが来て、mairieへつれてって小使をよこし、ヒル飯を喰はす。しかしどうも気力がおきない。身体に故障があるんじゃないかと思ふ。policeがBayonneへつれて行く。Bayonneではケンもほろろにはねつけられる。どうも、やらうといふ気力がな。身体がよくないんじゃないかと思ふ。長谷川を見たいな。今こそ淋しいぞ。病気は望む所。しかし餓えてたほるは困い。弱い奴だ。自殺は出来ない。天よ、此生損いに死を与へよ。

le7 mardi 昨夜は又乞食宿に止った。Verseinに金かせとかけた。明日迄これをまつて、よこさなかつたらBayonneはいやだ。一步でもBordeauxの方へ歩いてぶつたほれる。生命は大切だ。故郷へかへりたい。しかしどうしてかへれる。南京虫だと思つたが、どうもシラミらしいぞ。これじゃ長谷川へもとびこめないぞ。何にしても今度のBordeaux行でもうおれも御了ひだらう。

le8 mercredi 親をわづらはさずして故郷にかへり得る方便があればかへる。さもなきやもういい。たほれる。余り見苦しいものばかり見て何になる。夕Verseinの野郎に談判に行く。野郎シブイ奴だ。

le9 jeudi イマイましい。Bayonneを去る。Rionにおいて徒歩夜を通して歩む。pénible。

le10 vendredi 歩みながらい眠りがやってくる。タキ火を見つけて行ってあつたまる。大きいワンにうまいcafé au laitをいっぱい、すめば煙草をよこす。眠りが不足でなきや大いに気力が

もう了りかと思つたら、やうやく一工場でplaceを与へられる。ここいらではね起きようじゃないか。うまいスープに大口魚とジャガ芋のテンブラをcartineで喰ったじゃないか。

le11 samedi 半日杏の下草を可る。

le12 dimanche マッチすらない文無しだ。日曜とて煙草もすへない。しかし煙草をくれるおやぢがあるからよい。腹いっぱいへるのは何よりの事だ。道具をそろへて子供を可く處迄こぎつきたいな。

le13 lundi 今日は仕事を見つけてよこすのだとの事だ。つづいて働ける迄はおちつかない。なるべくならここいらでふみ止りたい。絵具箱をとりかへして、日曜にはかきたいぞ。此心は悪かない。神これをうけがうだらう。cuisine。芋の皮をむき、火にあたつて暮し、腹いっぱい喰ふ。何でもいい。かり越しになれば、それ丈長くいられるのだ。此寒空で漂浪はもう沢山だ。帳ついでcigarette一箱いただいたぞ。ここのmadameは気に入ったぞ。

le14 mardi 仕事なしに火に暖つて喰つてるのはいいが、金にならない。少し小使銭がなくてはいけない。神経をうんとぶくして、図々しくやるのだ。生命はたてないと決れば仕方がない。生きてて拙い絵をかかうじゃないか。全く一日喰ふ事ばかり思つて居る。いつも餓えた後はかうだ。それに病後の故もあると思ふ。仕事なしに只喰つて居るのは、しかし一寸気味があるいな。

le15 働くなんか感心しないが、かうしてては金にならない。少しは小使銭もほしい上に、早く絵具箱をととのへたい。もしここに止り得るとすれば、それも多分暖くなる頃だろう。madameがcigaretteをくれた。気がついてらあ。

le16 jeudi 月曜あたりから仕事が初まれば丁度いい。寒い間は死んだ気になって働くさ。一寸見当はつかないが、東京よりも寒いな。パンはどうやら喰ひあきた。今度は野菜と肉を腹いっぱい喰ひたいぞ。

le17 vendredi 朝土方の口を見つけに行く。断られる。寒いな。寒いと生きてる気もしない。寒さと喰ひたさのみだ。外に何にもない。

le18 samedi どうしても自分の現在の地位に甘んじて、勇猛精進せうといふ気にならない。いつも心の中にこれがおれのする事かと叫んで居る。おれに貧乏さすのは間違つてると叫んで居る。

も怨恨感を忘れ得ない。乞食同然の自分の位地を考へないで、ストーヴのは入った atelier で静かに考へ悦んで描くのが本当だと嘆息のみしてる。

le19 dimanche あらゆるvanitéをほうったへ。乞食だ。おれは賢いなどと思ふな。少し小使銭のたまる迄は何とも仕方はあるまい。寒すぎらあ。これではParisよりも寒いぜ。死んだ方ましだぜ。かう寒くては。一体他の奴等は寒くないのか。何にもしないで、じーっとしていたいな。余三年の我慢か。故郷へにげ帰って、日向ぼっこして暮さうぜ。明かに見ては耐らない。全くだ。働人などしててどうなる。盗人でもした方ましだ。尚三年の我慢がどうも六ヶ敷さうだぜ。生命はおしい。芋喰ってでも生きていたい。もう故郷へかへりたい。しかし其運びのつく迄生命がもつかどうか。

le20 lundi 悲しくなくもないな。昨夜は汗をどっさり出した。苦しんでやがる。今日はしかし少うし暖いのでました。Bayonne からもって来たノミばかりじゃない。又シラミだぜ。春になる迄は何事もこぼまい。其春迄ここにいつけるかどうか。明日可ら仕事があるのだ。さうだ。又々働人か。情ないな。

le25 samedi 二十一日から働いてる。昨日はカン定日なのに金をよこさぬ。夜 cantine の貞主からケンツクを喰ふ。一寸血がわいたが、考へりゃなる程乞食同然の身の上だ。文句もつけまい。まあ何うでもよい。我慢するのだ。しかし哀れなNoëlだ。煙草の吸ガラをひろって、新聞紙でまいてのんでる。夜のシラミと汗は耐らない。我慢しろ。そして此miseréから脱出しろ。神経を殺し、面の皮を厚くして、何でもクソ喰へてやっのける。シラミ退治は殆ど至難だぜ。ドラにもついでる。どうも明るい時を想ふ事は出来ない。

1921

le1 samedi いい御正月だ。暖いのが何よりだ。此頃は、又馬鹿に暖いのだ。artiste の仲も恋しくなくもないが、どうにも仕方がない。淋しくなくもない。又悲しくなくもない。しかし我慢するより他はあるまい。

le2 dimanche いつもゴミの中には入ってるようど気持ちがわるい。Paris が想はれる。何でおれ一人のみParisで勉強出来ないのか。一年でもよい。他の連中の如くに暮して見たいぞ。M<sup>me</sup>

ReudinとM<sup>lle</sup> Bernardの消息を知りたいな。何にしてもpas de sonsだ。もう一週間の辛棒だ。手紙のこないのは淋しいものだ。早く絵具箱をかひたいな。

le6 jeudi 希は片端よりふぢこわされる。昨日工場は御断りだ。心も氷るかと思った。しかし又心かろくなった。どうせここはおれのいる處じゃないといふ予感初っからあった。Arcachonに長谷川を訪ねよう。いづらかったらBordeaux迄こぎつけ、Muséeを見さへすりゃ後の事は考へなくともよからう。もう精力もつきた。余りしばしば同じmisèreをくりかへすのは耐らない。多きを求むるな。既に多くの貴い作品を見たじゃないか。Bordeauxの土となれ。午後Arcachonにつく。長谷川のvillaを訪ねる。

le7 vendredi 絵の本や絵具箱のおかれた室を見ると何ともいへない気持ちになる。おれとても描きたいに。おれとてもartisteとして暮したいに。雨だ。終日長谷川の室で火の側で本を見る。労働者など見ても反吐が出る。何とかして働人の足を洗ひたいな。

le8 samedi 最おれをなやますものはシラミだ。これさへなきやもっと楽しからうに。これはmisèreのドン底にいる感をおこさす。Bordeauxで客死ときめればよからうじゃないか。Tragiqueな最後。これが一等おれの馬鹿な性格にふさわしからうではないか。貧れな悲劇役者。それでよからうじゃないか。たほれる迄やるんだ。

le9 dimanche 夢想も希望も全く消えた。今迄にない気持ちだ。暴逆な血がどっかへ行つた。冷い淋しい気持ちだ。もうおれじゃない。御了ひだらう。気力のないのが何よりも残念だ。この港も余り安らかじゃない。手紙の返事をうけ次第去らう。

le10 lundi 陰天はおれの心を非常に悲しくする。故郷へかへって静かに描きたい。海の畔へ出て入目を眺める。心は涙でいっぱいだ。フランスは好きだ。しかし餓えて死ぬのは嫌だ。どうしても死にたかない。けれども如何なる。どうも此身体の工合はほんとうじゃない。もう御了ひだといふ気持ちをほらひ得ない。今迄は御了ひをも笑いながらうけようとした。今度はどうしても生命がほしいのだ。いけない。

le11 mardi 断ちがたきを断て。

le16 dimanche Arcachonを去る。

le21 prison

le29 samedi 恥辱と苦悩で心もさける。餓死より他はないとしても、せめてParisでうけたい。余りに淋しい。

le31 lundi Janvier Ecole de Beaux-artsへ勇をこして出かける。明日一日たりとていいではないか。暖い室で可愛ゆらしい女美術家連の中でいられる。

Février

le1 mardi 耐らないものを見るかと見れば、又美しいものにもぶつかる。いかにも気だてのよい娘さんが、おれのphotosをかひとり友達に絵を周旋してくれる。此娘さんの印象はBordeauxでの恐らくフランスでの最上の収獲だらう。フランスの女、特に女画生徒は非常に心持よい。此娘さん姉妹と絵を可った少うし年とった少うしロクでなしの處のある相ソよい娘さん、それとも一人怖ろしいハシャギやだが人の好い世話づきらしい娘さん、皆いい感じだ。パン代がある。鉛筆と手帳もとのへた。煙草もすへる。好天気でさへあれば、心は楽しからうではないか。

le3 jeudi 無料宿は三晩だと聞いたが、もう今日で一週間だぜ。Muséeを見る。どういふものか心怖ろしく暗い。寒さと陰天はすっかりおれをうちひしぐ。あらゆる希望、あらゆる悦は忍ち影を可くす。かかる時こそ故郷が想はれる。しかし煙草を吸ひ、caféでもとり得れば、此国の味はとも捨てがたい。Parisにつけるか。Parisで尚止り得るか。それとも故郷にかへるか。自分で自分をどうする事も出来ないからはどうい分らない。

le4 vendredi 学校へ前借に行く。月曜から水曜迄は休みだといふ。心臓も氷るかと思ふ。よくよく生命はほしいものと見える。よく発狂も自殺もしないで忍び得る事だ。郷里、哀れな親、Parisどれも皆耐らない。仕方がなきや甘んじてBordeauxの土となれ。書留が来てるとの事だ。Arcachonからか、Parisからかどちらかだらう。午後Mr. Lenormondをたづねる。先生、絵は拙いが人は至極いいな。おれはムチャものだ。それなのに善良い人達に限って、おれを愛する。どういふ訳だらう。

le5 samedi Posteへ行って手紙をうけとる。Hasegawa からだ。青山と帰国の運びに就てホン走するとの事だ。血が逆流する。天地もグラグラ

動く。かへるより他ない。郷を想ふ心もすでに動いていながらも、如何にも残念だ。Toito氏に可く。多分当るまい。既に気力を失ってるから。

le6 dimanche どうも今迄と少うし気持ちが違ふ。感激がない。特に女性に対する感情が閉ぢてる。余りにイヤなものばかり見せられ、又余りにつづいておれの性情に不向な途ばかり歩まされたので、感官が死んでるのだろう。それに冬だ。心をのべて訴ふるべき友もない。身体の方はどうか知ら。これも解るまい。

le12 samedi l'asileを去る。夜は地上に眠る。どうもいけない。事によると祖国の土はふめまい。しかしParisで病気でやられりやむしろ其方よい。Paris迄はこぎつけたい。

le13 dimanche どうしても床に眠りたい。惜しい。五フランを投じて宿をとる。しかし眠安らかではない。あらゆる試練をうけてもたほれないといふのでなければ、扱ばれたる奴ではない。どうしてもおれは属物だ。ここBordeauxの土となつてもいいではないか。おれは急激の病気をのぞむ。しかし悪虐なる運命は、だんだんにおれの心身をこぼって行く。耐えがたい。シラミが、憩ふとするとごめきだす。これはもう駄目だぞとさきやく。

le15 昨日consulatへ行つたが、まだ返事は来ないといふ。もう駄目だといふ気がする。生きようといふ執着がだんだんに消えて行く。青山にかいた。あらゆる希望、あらゆる夢想は皆影をかくして了った。気力さへあれば、今の有態とて大した事はない。病気ともうmisèreも沢山だといふ気持ちが、かうしたのでらう。

le16 mercredi Mr. Lenormondのbontéはまことに心地よい。しかしl'asileへかへれるにしても、此シラミではどうにも安らかに眠れまい。シャツをかへて寝床の上で眠りたいな。どうやら熱がこもってるらしいぞ。Parisへかへれるにしても、Parisでシラミはいけない、ドン底だといふ気持ちをさせる。

le17 jendi もういけない。精根がつきた。何にも希はない。病気でやってくれ。Mr. Lenormondが、l'asileへかへるといつてよこした。今夜は寒くなく眠れるぞ。しかし既に本物の病氣らしいぞ。単に疲労じゃあるまい。

le18 vendredi いけない。床に就きたい。青山から手紙をよこす。絶望の気がする。午後はボ

一ズしない。ストーヴの側で憩ふ。Mr. Lenormondの好意はひどくおれをなぐさめる。

le19 昨夜少うし苦しんだ。今朝は大分よい。いっそどつと悪くなって一息にやられりやむしろ楽だのに。青山に親の名儀で大使館から金かりてくれ、これが決着の處だとかき送る。これが運んだとて口惜しいが、おれの生命とて二三百円には値せうじゃないか。これすらが聞かれなきやParisでたほれよう。たいていの處で見切る事だ。身体をこわしてはどうにも仕方はあるまい。かへれるなら故郷に入ってカユをすすってでも描きたい。しかしどうやらもう想断ちさうだ。misereもここ迄おちれば、はひ出す事はとてもむつかしからう。Parisで只同国人だといふ義理合丈で、イヤイヤ面倒を見られてひどい最後を見るならば、むしろここ Bordeauxでたほれた方malıdır。Lenormondのfon cœur丈で沢山だ。絵といふか、Muséeといふか、絵もMuséeもespritがあがってからの事だ。病気じゃ仕方がない。病気でなきやParis迄の汽車旅行、Louvre Luxembourgを訪ふ事、これ丈でも楽しからうが、想煩ふな。やがて寢床に入り得ようではないか。働人共大声で喋り散して。幸うすく生れたな。フランス迄こんな醜い陋な奴原を見に来たのじゃない。故郷の海の畔、山上又谷蔭で孤りで考へたい。運命よこれ位のササやかな希は容れてくれ。

le20 dimanche 夜汗が出る。しかし多分たほれはしまい。故郷へかへって描くぞ。おれの身体もしつこい。午後Muséeを見る。もう一日も早く船に乗りたいな。

le21 lundi 午後Mr. Lenormondの處で青山から手紙をうけとる。二百フラン封入してる。Parisへかへれとの事だ。人を煩はすとどうも心が沈んでいけない。夕どうも身体がいけない。弱い心が出る。しかし何にしてもLouvreを見Academieでcroquis位は出来よう。それで沢山だ。

le22 mardi Bordeaux 出発。おお、Paris。Parisで又どういふ目に会ふのか。おお、故郷に逃げかへったにしてからが、希ふ處の安静が得られるか。闘ふのはイヤだ。悲しいな。

le23 mercredi 朝暁Parisに入る。心は怖れと不安でふるえ上ってる。午近く青山の宿を訪ねる。どうも話が不確だ。不安で仕方がない。Luxembourgを見る。悲しいな。心は既に死したてる。Academieを過ぎる。M<sup>me</sup> Raddaはいない。其上

におのれの風体、いぢけて了ってる。心を可へり見て、もう駄目だと思ふ。もう何にもつながりがない。愛念がしぼんじってる。少うし安らかな宿さへ見つかりやよい。Parisで逝かうじゃないか。

le24 jeudi 大使館へ行く。例のニガ手の宗村先生とはうってかわった人のよい先生がいて、馬鹿に丁寧にあつかう。送還の事きかれる。これですっかり安心。汗も余程ひく。夕中原をたづね、飯をよばれてかへる。

le25 vendredi Louvreを見る。午後はmarchant le tableauxの表を見て巡り、後大使館を過る。宿は二週間前拂にしておく。夜遠山の□□□たづねる。

le26 samedi 朝Louvre。夜は会食。

le27 dimanche 手紙を可く。午後青山とモデルの家をたづねる。

le28 lundi 古箱をかふ。午後はgrande chaurviere。M<sup>me</sup> Radda其他に会ふ。向ふは以前の如く、親しくあつかう。しかしどうもおれの方では少うしfroidだ。おれの心は今どっかに少うし穴があいてる。昨日は全く平熱だつたに、描くと非常に疲れる。

le1 Mars 午前はLouvre、午後はLuxembourg。どうもいけない。どこへ行っても冷い風が吹く。おれ一人世界にとり残されてる気持だ。

le3 jeudi 矢張身体がいけない。どうしても辱と涙にみちし破れし人、だ。乞食の役割は決しておれに適當したものじゃない。早く船に乗りた。早く故郷に入りた。早く体力を恢復し、静かに描きたい。

le4 vendredi 敗れたる人間に何處へ行つたて暖いものは在りはせん。よろしい至難の途を行け。おのれの心と自然、これ丈がよい處だ。何もかも思断て。此態で何が出来る。

le5 samedi どうにも破れし人だ。早く故郷の海の畔にかへりた。Destinよ。これ位の希は許してくれ。悪い事をせうといふのじゃない。描かうといふのじゃないか。どこからも手紙が来ない。敗残者、乞食を相手にする奴はあるまい。よろしい。remordsが酷ラツなれば、いよいよ深く仕事にうち込む事だ。天よ健康丈はうばってくれ。どうも少うし怪しいが、しかしおれもしつこいぞ。Academieで会つた時にはさうでもなか

ったが、Raddaの柔しい声と微笑が想はれる。肺をやられてるのじゃないか知ら。これ丈が気がかりだ。死も怖れはせぬ。死んだ方むしろ楽だ。しかし何にも仕事を残さないで去りたかない。

le8 mardi 大使館へ行って、経過をきく。どうも駄目らしい。心も氷る。Parisの土となるのも可まわない。しかしそれ迄の辱屈と苦痛はとても忍びがたい。天よ、急激の病を下して、おれの生命をすぐに断てくれ。よろしい。やる丈の事をやって見るさ。其上でそれが運命とあれば甘んじてたほれるさ。

le9 mercredi 何にも面白かない。屈辱感で心は一切しぼんじってる。

le11 vendredi 何も可もすっきり運ばない。いいじゃないか。Parisの土となれ。其方御前の最後らしいぜ。Saito氏をとふ。ambassade。大使に手紙を可く。国からの消息をうけとる。

le12 samedi 齋藤氏に手紙を可く。

le16 mercredi 大使館をよぎり、Saito氏を訪ふ。どちらも話がつかない。どうなるといふのだ。苦しむとは非常のものだ。帰心が動いてるばかりに苦しむのだ。

le17 jeudi 勇をこして又大使館へ行く。話がついたとの事だ。今度はMarseilleへの旅費だ。方々へ手紙を可く。

le18 vendredi まだ何かあると見え、も一度たづねたい事があるから出て来いといふ。不安で仕方がない。これが破られては、もうとても耐えがたいと思ふからだ。絵を描いても矢張不安と見え、荒くていけない。

le19 大使館へ行く。何だ一船おくれるといふのだ。午後中原と散歩する。マルセイユ迄の金を出さうといふもの好が出て来た。さあもう安心だ。

le7 Avril Paris 出発。

le8 朝Marseille着。夜はPalais cristal。MélieとAnnaに会ふ。Annaと夜をすごす。Marseilleはsilenceの邦だ。乞食の感ばかりじゃ耐らない。全く若い真紅の石竹花を再び見出し、詩人になってMarseilleを去り得ればいいじゃないか。

le11 Marseille 出帆。航海は極めておだやかだ。海を眺めてれば面倒くさい事も皆どっかへ行っちゃう。

le26 Avril 印度洋だ。何とはなし心の隅に寂しい風がふき入る。とても耐らないのぞ。飛出し

た邦へ今敗れた身でかへるのだ。魂をいれかへなくちゃ、とてもむつかしい。しかもとても魂はいれかわりさうもない。おれはどうい賢者じゃない。余りに貧しい生活は耐らない。行く處もなきや、すむ處もない。此心は忍びがたい。いつおれに平静の暮しが与えられるか。

le27 故郷の海の畔で、果して煩なく黙想し得るか。数々の痛ましい追懐と共に、身にまつわる殆ど抗しがたい煩ひ、余りに酷ラツな不自由さ、それらによって心は破れて了ふのではない知ら。

le10 Mai Singaporeからのつた女が、おれの心を乱す。此女でもよい。一生共にいたい。しかし此女の貞主たる資格すらおれにはない。馬鹿ノ極端な貧乏もたまらない。孤独をも忍んで突進するより他に、手前にどんな道があるかい。永い航海も終末に近づいた。馬鹿もよいカゲンでよい。よろしい裸になって自然へ飛込むぞ。

le21 Mai 神戸着。

le25 郷に入る。

le27 何がまことか。今のおれの心の態はいいのか、わるいのか。何にも分らない。いよいよ何にも分らない。とに角描く事だ。

## おわりに

原勝四郎の『滞欧日誌』を読み終えてみると、彼の実に悲惨な日常生活が垣間見られる反面、芸術に対する熱情が緊々と伝わってくる。勝四郎の滞欧期間は、1917年(大正6年)暮から、1921年(大正10年)4月までの約3年半ばかりであるが、この間、マルセイユ、パリ、グルノーブル、ナポリ、ローマ、アルジェ、ボーン、サン・ポール、モンペリエ、バイオンヌ、ボルドー、アルカッションなどを放浪、毎日が生活苦との戦いであった。大志を抱いてヨーロッパに渡った勝四郎にとって生活苦との戦いは、芸術家としての焦燥・憤激・厭世・自己嫌悪との戦いでもあった。現実的には勝四郎はこれらの戦いに破れ、敗残者として帰国するのであるが、勝四郎が滞欧生活から得たものは、敗残者の精神ではなく、画家原勝四郎としての生き方ではなかつただろうか。自然と対座し、真理を求め、ただ描くこと。それが滞欧生活から学んだ勝四郎の生き方と言えようか。海を眺め、

空を眺め、毎日魚釣りをして、自由に描きたいと  
 日記にも記しているように、帰国後の勝四郎の生  
 活はまさにそのものであった。今、勝四郎の芸術  
 生涯を振り返ってみると、この滞欧時代において  
 彼の芸術精神が形成されたと言えようか。その意  
 味において、『滞欧日誌』は彼の芸術精神を知る  
 上で貴重な資料と言えよう。

今回で原勝四郎の『滞欧日誌』を全文掲載出来

## 単語索引

### (I)

P. 3	<i>Materiel roulant</i>	鉄道
	<i>Lyon</i>	リヨン
	<i>Grenoble</i>	グルノーブル
	<i>St. Etienne</i>	サンテチエヌ
	<i>retourne</i>	返る
	<i>Telegraphie</i>	電信
	<i>Militaire</i>	戦争
	<i>Souwa</i>	諏訪ホテル
	<i>Paris</i>	パリ
	<i>Italie</i>	イタリア
	<i>Cannes</i>	カンヌ
	<i>Algérie</i>	アルジェリア
	<i>France</i>	フランス
	<i>Montpellier</i>	モンペリエ
	<i>Aôut</i>	8月
	<i>Marseille</i>	マルセイユ
P. 4	<i>Nice</i>	ニース
	<i>Théâtre</i>	劇場
	<i>esprit</i>	精気
	<i>image</i>	イメージ
	<i>gare de invalide</i>	インバリット駅
P. 5	<i>Midi</i>	フランス南部
	<i>Louvre</i>	ルーブル美術館
	<i>violon</i>	バイオリン
	<i>Calvados</i>	カルバドス
P. 6	<i>Grec</i>	ギリシャ
	<i>Espagnole</i>	スペイン

た訳であるが、本文は出来得る限り原文に近いよ  
 うに心がけた。しかし、意味の通じない部分、ス  
 ベルが不明のフランス語、かすれ・破れ・にじみ  
 等による読めない部分もあった。また人名につい  
 は、藤田嗣治・青山熊治などごく少数の人名が解  
 るのみで、他の多くの人名については不明であっ  
 たが、今後以期したい所存である。

	<i>Arabe</i>	アラブ
	<i>francs</i>	フラン
P. 7	<i>malicieux</i>	意地の悪い
	<i>Musée Rodin</i>	ロダン美術館
	<i>sérénité</i>	清明
	<i>contemplation</i>	黙想
	<i>dure</i>	きびしい
	<i>vérité</i>	真理
	<i>sincérité</i>	誠実
	<i>Septembre</i>	9月
	<i>Opera</i>	オペラ
	<i>illusion</i>	空想
	<i>gare de Lyon</i>	リヨン駅
	<i>pauvre diable</i>	哀れな野郎
P. 8	<i>pasport</i>	パスポート
	<i>Monceau</i>	モンソー公園
	<i>Académie</i>	美術学校
	<i>Cel mort</i>	破滅
	<i>commissaire a visa</i>	許可査証
P. 9	<i>consolation</i>	慰め
	<i>Roma</i>	ローマ
	<i>Atelier</i>	アトリエ
	<i>Odeon</i>	オデオン劇場
P. 10	<i>Renoir</i>	ルノアール
	<i>annonce</i>	広告
	<i>Villa</i>	別荘
	<i>Monet</i>	モネ
	<i>naive</i>	純真
P. 11	<i>l'art</i>	芸術

	<i>Versaille</i>	ベルサイユ宮殿
	<i>Olympia</i>	オリンピア劇場
	<i>Palais</i>	館
	<i>Napoli</i>	ナポリ
P. 12	<i>magnifique</i>	装麗な
	<i>aristocratique</i>	貴族的な
	<i>amitié</i>	好意
	<i>abri</i>	避難所
	<i>Musée National</i>	国立博物館
	<i>Pompèi</i>	ポンペイ
	<i>Vesuvio</i>	ベスビオ
	<i>variété</i>	軽演劇
	<i>Raphüel</i>	ラファエル
	<i>Michelange</i>	ミケランジェロ
P. 13	<i>pasport</i>	旅券
	<i>Alger</i>	アルジェ
	<i>station</i>	駅
	<i>Buffé</i>	食堂
	<i>compatriote</i>	同国人
	<i>garçon</i>	奉公人
	<i>vagabonde</i>	放浪者
	(II)	
P. 15	<i>Nobembre</i>	11月
	<i>fête</i>	祭
	<i>misère</i>	悲惨
	<i>pauvre</i>	貧乏な、哀れな
	<i>rêveur</i>	夢想家
P. 16	<i>afrique</i>	アフリカ
	<i>artiste</i>	芸術家
	<i>mécanicien</i>	技術者
	<i>casino</i>	娯楽館
	<i>timide</i>	無気力
P. 17	<i>fatalité</i>	運命
	<i>poche</i>	ポケット
	<i>talent</i>	才能
	<i>mairie</i>	町役場
	<i>placement</i>	職業案内所
P. 18	<i>fier(ere)</i>	高潔な

	<i>danse(nse)</i>	ダンス
	<i>Delacroix</i>	ドラクロア
	<i>Algerienne</i>	アルジェリア人
P. 19	<i>carte d' identite</i>	身分証明書
	<i>Puvis</i>	シャバンヌ
	<i>consolatrie</i>	慰める人
	<i>sauvage</i>	野蛮な
P. 20	<i>peintre</i>	画家
	<i>sincérité</i>	誠意
	<i>l' amour</i>	恋愛
	<i>gosse</i>	子供
	<i>Bayonne</i>	バーヨン
P. 21	<i>Maupassant</i>	モーパッサン
	<i>automne</i>	秋、成熟期
	<i>mistral</i>	北東風
	<i>tempérament</i>	性分
P. 22	<i>antique</i>	古代の
	<i>Baudelaire</i>	ボードレール
	<i>vert</i>	線
	<i>Emeraude</i>	エメラルド
	<i>allons</i>	進め
	<i>motif</i>	動機、主想
	<i>pour</i>	～のため
	<i>patir</i>	出発する
	<i>cœurs</i>	愛情
	<i>légers</i>	活気な
	<i>semblable</i>	このような
	<i>ballons</i>	気球
	<i>cher</i>	親愛な
	<i>camarade</i>	友達
	<i>homme</i>	人間
	<i>conscience</i>	良心
	<i>femme</i>	女
P. 23	<i>patron</i>	主人
	<i>Ecole des Beaux-arts</i>	美術学校
	<i>etranger</i>	外国人
P. 24	<i>Janvier</i>	1月
	<i>vision</i>	空想
	<i>mi sère</i>	貧乏



<i>Venus</i>	ビーナス	P. 30	<i>cabinet</i>	小室
<i>torse</i>	トルソー		<i>demi litre</i>	半リットル
<i>energe</i>	エネルギー		<i>Remords</i>	後悔
P. 25			<i>mouise</i>	貧乏
<i>Alliéh</i>	親族		<i>bohemien</i>	放浪者
<i>peintre</i>	画家		<i>bon</i>	親切な
<i>etudiant</i>	学生		<i>plier</i>	従う
<i>model</i>	モデル		<i>corps</i>	身体
P. 26			<i>chemise</i>	シャツ
<i>Phillippeville</i>	フィリップビル		<i>vulgaire</i>	俗世間
<i>monsieur</i>	～様		<i>paysanne</i>	百姓
<i>Bône</i>	ボース		<i>juin</i>	6月
<i>croquise</i>	クロッキー		<i>intelligence</i>	理解
<i>douleur</i>	苦悩		<i>misérable</i>	不幸
P. 27			<i>dites</i>	言う
<i>pilote</i>	水先案内者		<i>comme</i>	～のように
<i>gentil</i>	親切		<i>Colonie</i>	植民地
<i>situation</i>	立場		<i>tempête</i>	騒乱
<i>voyageur</i>	旅行者		<i>résignation</i>	忍従
<i>St. Paule</i>	サン・ポール		<i>Bon cœur</i>	善良な心
<i>Ferme</i>	農場	P. 31	<i>âme</i>	魂
<i>précieux</i>	貴重		<i>cabine</i>	小室
P. 28			<i>bonhomie</i>	親切
<i>Mars</i>	3月		<i>noble</i>	気高い
<i>directeur</i>	支配人		<i>Pyrenees</i>	ピレネー山脈
<i>Avril</i>	4月		<i>soution</i>	支え
<i>Atlantique</i>	大西洋		<i>histoire</i>	歴史
<i>marie</i>	新郎		<i>voleur</i>	泥棒
<i>française</i>	フランス人		<i>records</i>	回想
<i>fiancée</i>	婚約者		<i>juillet</i>	7月
<i>Mai</i>	5月		<i>mal</i>	悪い
<i>sympatique</i>	同情的		<i>yeux</i>	目
<i>portion</i>	部分	P. 32	<i>espérer</i>	希望する
<i>expression</i>	表情		<i>journee</i>	日給
<i>pompe</i>	ポンプ		<i>Helas</i>	ああ
P. 29			<i>aise</i>	自由
<i>Résignation</i>	忍従		<i>morale</i>	心
<i>sacrifice</i>	献身		<i>Esclavage</i>	奴隷
<i>cantine</i>	売店	P. 33	<i>cave</i>	地下室
<i>louf</i>	気の変な		<i>frugale</i>	質素な
<i>monde</i>	世界		<i>espérance</i>	希望
<i>laide</i>	醜い			
<i>jaloux</i>	じつと深い			
<i>Etre</i>	存在する			
<i>prisonnier</i>	囚人			

<i>Merde</i>	糞	<i>Monsieur</i>	～氏
<i>direction</i>	監督官	P. 38	
<i>Octobre</i>	10月	<i>Bordeaux</i>	ボルドー
<i>ambroisien</i>	芳しい臭いのある	<i>cuisine</i>	料理場
<i>fête</i>	祭	<i>cigarette</i>	タバコ
P. 34		P. 39	
<i>Dieu</i>	神	<i>vanité</i>	虚栄心
<i>enfant</i>	子供	<i>Noël</i>	クリスマス
<i>prodigue</i>	おおまかな	<i>Arcachon</i>	アルカッション
<i>œuvres</i>	全作品	<i>Tragique</i>	悲惨
<i>penible</i>	辛い	<i>prison</i>	刑務所
<i>commissaire</i>	委員会	P. 40	
<i>papier</i>	書類	<i>Fevrier</i>	2月
<i>hôpital</i>	病院	<i>photos</i>	写真
<i>Novembre</i>	11月	<i>poste</i>	郵便局
P. 35		<i>consulat</i>	領事館
<i>mon frere</i>	友達	<i>bonté</i>	好意
<i>Courbet</i>	クールベ	<i>l'asile</i>	保護施設
<i>Delacroix</i>	ドラクロア	<i>misère</i>	貧乏
<i>cadeau</i>	贈物	P. 41	
<i>ma sœur</i>	女友達	<i>cœur</i>	気持
<i>pain</i>	パン	<i>marchant</i>	動いている
<i>mandat</i>	為替	<i>tableaux</i>	掲示板
P. 36		<i>froid</i>	冷淡
<i>Méditerranée</i>	地中海	<i>Destin</i>	運命
<i>malheureux</i>	貧乏人	<i>remords</i>	後悔
P. 37		P. 42	
<i>behême</i>	自由	<i>ambassade</i>	大使館
<i>vagabond</i>	放浪者	<i>Mars</i>	3月
<i>ange</i>	天使	<i>Avril</i>	4月
<i>Decembre</i>	12月	<i>Mai</i>	5月
<i>Toulouse</i>	ツールーズ	<i>Singapore</i>	シンガポール

和歌山県立近代美術館年報

昭和52年度

昭和54年3月31日 印刷

昭和54年4月1日 発行

編集・発行

和歌山市小松原1丁目

和歌山県立近代美術館

印刷

和歌山市出水4の1

野田印刷株式会社